



Title	近現代語「可能」の成立：日中両語間の双方向的影響
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2017, 57, p. 97-150
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61363
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近現代語「可能」の成立

—日中両語間の双方向的影響—

田野村 忠 温

1 はじめに

日本語における「可能」という語の使用はおそらく19世紀の半ばに始まる。それ以前の日本語に「可能」の語は存在しなかった。使用頻度の高いこの有用な語を使い慣れた現代人にとってはそれがないという状況を想像しがたいほどであるが、「可能」の語がなかった時代には「～できる」「～してもよい」「～することもある」などの言い回しによって表現上の需要は満たされており、「可能」がなくても特段の不都合があったわけではない。とは言え、「可能」の語の成立は独自の範囲の意味を表す表現の誕生を意味し、しかも、「可能性」のような複合語も作り出されて、それまでは簡単には表現できなかったことを1語で言い表せるようになった。したがって、「可能」の語の成立は新しい概念の生成をも意味したと無理なく言うことができる。

「可能」の語は中国語にもある。と言うよりも、中国語には古来「可能」という言い回しがあった。しかし、関連の研究によれば、「可能」の文法的な性質と意味・用法は時代や地域によって異なる。そして、それらを連続するものと見てそこに派生の関係を見出そうとする立場の一方で、現代語の「可能」は過去のそれからは独立した、日本語からの借用語だとする説もある。

近現代語の「可能」の成立についてはすでに日中両国にいくつかの論がある。この小論はそれらに対する疑問を出発点とし、資料の調査を通じて「可能」の成立過程を明らかにしようとするものである。問題が複雑であるうえに利用できる証拠が限られており、確実な語史の復元は容易ではないが、「可能」の語史の初期の部分に関して筆者の推定に基づく一貫したストーリーを描いてみたい。

2 予備的考察

「可能」の語史に関する議論に入る前に、その前提としていくつかのことを述べておく必要がある。

2.1 日常語の「可能」と専門用語としての「可能」

まず、この小論の関心は基本的に日常語としての「可能」にある。

哲学や論理学においては「可能」は「必然」と対を成す重要語であるが、そうした定義、限定された概念の観点から「可能」の語を考えるわけではない。また、日常語の「可能」を文法研究における「可能」の用語と同一視することができないことにも注意が必要である。文法の議論における「可能」¹は、日常語の「可能」と同義ではなく、「可能」の表現と慣習的に呼ばれる——あるいは、当該の論者がそう呼ぶ——言語形式の表す意味”を指す。例えば、「あの人は中国語を話せる」という可能表現の意味を「あの人は中国語を話すことが可能だ」と言い表すことは普通しない。つまり、文法研究の文脈においては動作主体の能力は可能表現の表す多義のうちの重要な1つであるが、日常語で能力を語るのに「可能」を使うことはあまりしない。慎重に表現すれば、使用が相対的に限定されている。日常語の「可能」は主体の能力よりもむしろ「会に出ることは可能だ」のように外的な要因に関わる実現性を表すのに多く使われる。筆者の作成したWebコーパス（拙論（2010））を使って調べると、「～は可能だ」の空所に特によく現れる表現は「利用」「参加」「変更」「予測」「治療」「キャンセル」などの語である。文法研究における「可能」の概念は半ば循環論的、同語反復的で——「可能」の名で呼ぶ形式の表す意味を「可能」と考えるという意味において——、日常語で「可能」が表す意味には一致しないのである。²

哲学や文法の用語としての「可能」も無論「可能」という語の用法の一部であり、さらに言えば、日本語における「可能」の使用は学術的な文脈において始まったという意味におい

¹ 日本語の可能表現については渋谷（1993）などを参照。

² 日本語の研究において「可能」という語自体が考察の対象とされた例は非常に少ない。後に取り上げる「可能」の語源に関する説のほかには、日中対照の観点からその意味・用法を考察した曹（2007, 2008）がある程度である。「可能性」については、電子資料を用いて大正期以後の用法の変化を分析した服部（2011, 2016）がある。

これとは対照的に、中国語の「可能」に関する考察や言及は少なくない。言語研究者のこの関心の度合いの差は1つには日中両語における「可能」の位置付けの違いによるものであろう。すなわち、日本語の「可能」はやや“高級”な漢語である。幼い子どもが使うような語ではなく、日本語学習者が初歩の段階で覚えなければならない語でもない。そのような語は一般に考察の対象とされることが少ない。それに対し、中国語の「可能」は純然たる基礎語である。加えて、中国語に「可能」という言い回しは古来存在し、しかし、現代語の「可能」には過去のそれと大きく異なる面がある。そのために語史に対する関心を引き起こしやすいという事情がある。

ても、「可能」の考察から専門用語を排除してよいわけではないが、いずれにせよ「可能」の意味が使用の文脈によって異なることの認識が必要であり、この小論は日常的な言語の中に定着した「可能」を第一義的な関心の対象とするということである。

2.2 「可能」と「可能性」の関係の特殊性

次に確かめておくべきことは、「可能」とそれを要素として含む重要な複合語である「可能性」との意味的な関係の特殊性である。

通常、形容動詞語幹の類に接尾辞「性」を加えてできる複合名詞はその語幹と共通する意味を表す。例えば、「夜道は危険だ」という文と「夜道の危険性」という名詞句とで「危険」の表す意味は共通であり、少なくとも容易に指摘できる違いはない。1つの文章中にそれらの表現が近接して現れる状況も容易に想像することができる。しかし、「可能」と「可能性」に関しては事情が異なる。「出席は可能だ」という文と「出席の可能性」という名詞句が使われる文脈は一致せず、「会に遅れる可能性」を「会に遅れることが可能だ」のような文に開くことも普通しない。

このように、「可能」と「可能性」は意味の不对応という点において形式上共通する多数の語対の中で例外的な存在である。両者の意味的な乖離はおそらくそれぞれの語の成立にあずかった possible、possibility などの外国語の語対における意味差の反映として生じたものと思われる。

2.3 「可能」および関連表現の多義

日中両語の「可能」も「可能性」も、また、文法研究で可能を表すとされる各種の表現も多義的である。英語の possible、can、may などの語も同様である。

それらの表現の多義性についてはすでに多くの議論があるが、ここでは筆者の理解を「可能」の語史を論じるうえで必要となる範囲のことに限定して述べる。

私見によれば、「可能」および関連表現——以後、便宜上「可能類の表現」と呼ぶ——の表し得る主要な意味は2つの種類に大別することができる。そのうち単純に説明できる第1種の意味は、“事態が実現することがあり得る、実現しないとは限らない”——あるいは、“命題が事実であることがあり得る、事実でないとは限らない”——というものである。「台風が接近する可能性がある」「これは食中毒の可能性がある」のような文によって例示される意味である。論理上の「可能」の概念の基礎になっている意味であるので、以後これを Lebrun (1965) ——英語の助動詞 can と may の用法に関する考察——の logical possibility という用語にならって「論理的可能性」と呼ぶ。「可能」の意味を特徴付けるのに「可能」という表現を使うことは本来望ましくなく、むしろ「実現性、事実性の存在」とでも呼ぶべ

きところであるが、それも満足な名称であるわけではないので、分かりやすさを優先する。

可能類の表現の第2種の意味は、事態が実現するかどうかではなく、事態の実現のための前提条件が整っているかどうかに関わる。これには2類のものがあり、その1つは、“事態を実現するための必要条件が満たされている”ことを表す。その必要条件にもいろいろな種類のものがあり、例えば、「彼はこの川を泳いで渡れる」における人の能力、「この川は歩いて渡れる」における事物の性質、「予約はまだ変更できる」における契約の内容がある。表面的にはそれぞれの条件は性質が異なるが、いずれもそれが満たされていなければ事態が実現しないという点で共通している。³

第2種の意味のもう1つの類は、事態の実現の適切性を述べるものである。すなわち、“事態を実現することに問題がない、実現しても支障が生じない”ことを言うものであり、例えば、「ここには空き缶を捨てることができる」における許容、「日本では水道水を飲める」における安全性に関わる表現などが該当する。缶を捨てたり水道水を飲んだりすることは実現は容易でも、それが禁じられている、結果として健康に支障を来すとといった問題があり得る、しかし、実際にはそうした不都合がないということを可能類の表現によって表す。

第2種の2類の意味を一括して「実現条件の充足」と呼ぶ。2つ目の類の意味は直接的には“事態実現の条件”ではなく事態が実現したときの支障の有無に関わるが、そのような考慮も“事態実現の条件”として働き得る。なぜならば、実現は容易でもその事態が問題を伴うとあらばみだりに実現するわけにはいかず、結果的に実現が制約されることになるからである。

以上のように、可能類の表現の表し得る主要な意味は「論理的可能性」と「実現条件の充足」の2種類である。これに基づいて、2.1、2.2で簡単に確かめた「可能」と「可能性」の表す意味の範囲をあらためて捉え直せば、日常語の「可能」は通常「実現条件の充足」を表すに使われ、ただし、能力を語るのにはあまり使われない、そして、「可能性」は2種類の意味の限りではもっぱら「論理的可能性」を表すのに使われるということになる。

以上の確認と考察を踏まえて、日中両語における近現代語「可能」の成立過程の問題に話を進める。

³ これらの意味を本文では“事態を実現するための必要条件が満たされている”という形で説明したが、それには不十分な点がある。動作主の意図も事態の実現のための必要条件と言い得るが、しかし、Lebrun が的確に指摘しているように、動作主の事態実現の意図を可能類の表現を用いて表すことはないからである。したがって、本来動作主の意図を切り離して扱う必要があるが、本文では論述の複雑化を避けるためにそうした配慮はあえて省いた。

なお、目下問題としているような意味を Lebrun は“動作主による事態の実現に対する障害の不在”として特徴付けているが、私見では少々不正確である。事態の実現が可能だというのはむしろ、“事態の実現を阻害し得る要因が対抗要因のために効力を発揮しない、もしくは、そもそも存在しない”ということであろう。例えば、「彼はこの川を泳いで渡れる」という文が表すのは、川を泳いで渡る困難の不存在ではなく、阻害要因は存在するが彼の遊泳能力がそれに打ち勝つということだと思われる。

3 従来の論とその検討

「可能」の成立に関する考察は多くはない。日本語の「可能」については、それが明治期における造語だとする説があるだけである。他方、中国語の「可能」に関しては複数の説があり、その用法の時代差を中国語内部で生じた変化として説明しようとする立場と、現代の「可能」は日本語からの借用語だとする立場とがある。

ここではそうした従来の論を概観したうえでその問題点を検討し、筆者の推定する近現代語「可能」の成立過程を見通しとして述べる。

3.1 日本語の「可能」の発生に関する説

日本語の「可能」の語史に関するおそらく最初の——そして、実質上唯一の——記述は惣郷・飛田編（1986）におけるものである。そこには次のように記されている。

かのう 可能

[哲学字彙・明14] virtual.

[辞林・明44] ①できうべきこと。あたふこと。②思惟上に於て矛盾なきこと。③〔文法〕助動詞の分類の名、勢相に同じ。

[模範英和辞典・明44] Possibility.

▷意味 明治時代の新語か。明治六年の『附音挿図英和字彙』の Possibility, compatibility, potential には「可能コト」^{アタウベキ}⁴という訳語がある。明治二年の『ウェブスター氏新刊大辞書と訳字彙』の possibility にも「可能コト」とある。「あたふべき」に当てた漢字「可能」の音読みから生じた語。

つまり、「あたふべき」という表現が漢字を用いて「可能」と表記されていたのが音読みされるようになり、その結果として「可能」^{かのう}という語が成立したと言う。『日本国語大辞典』第2版第3巻（小学館、2001年）の「可能」の項目の「補注」にも同じ考えが述べられている。見やすさのために適宜改行を加えて引用する。

か-のう 【可能】

〔名〕（形動）ある物事が実現できること。または、実際にありうること。また、その状態。*物理学と感覚（1917）〈寺田寅彦〉「振動の等時性といふやうな事を考へ⁵時

4 惣郷・飛田による引用では「可能」の振り仮名が「アタウベキ」になっているが、訂正して引用した。

5 『日本国語大辞典』では「考え」になっているが訂正した。

計を組立てる事は可能であるかもしれぬ」* 侏儒の言葉（1923-27）〈芥川龍之介〉侏儒の祈り「云はば不可能を可能にする夢を見るがございます」

[補注] (1)「あたふべき」に当てた漢字「可能」の音読みから生じた明治期の新漢語。
(2)「哲学字彙」では「Virtual」に「可能」の訳を当てている。

「可能性」に関する惣郷・飛田の記述も併せて引用しておけば次の通りである。

かのうせい 可能性

[哲学字彙・明 14] possibility.

[普通術語辞彙・明 38] 英 Possibility. 独 Möglichkeit.⁶可能性とは（第一）或物がまだ実現でないことを意味し、（第二）には、仮令或物が現実的存在を有して居ても、其の存在には、原因的或は合理的必然性を欠いで居ると云ふ意義に使用せらるゝのである。〈下略〉⁷

▷意味 英語 Possibility の訳語。明治二三年の『法律字彙』には「可能的」の訳がある。

『日本国語大辞典』は「可能性」の項目では、「①事柄や事件について、それが起こるか起こらないかが未確定である状態。」「②物事が実現できる、または、その状態になりうる見込みをもっていること。」という2つの語義を立て、「語誌」として「①の挙例の『哲学字彙』での訳語が後の辞書に継承されて定着したものと思われる。」と説明している。

3.2 「あたふべし」起源説に対する疑問とそれに代わる筆者の推定

惣郷・飛田の記述を見てまず筆者が抱いた疑問は、過去の日本語で「あたふべし」という言い回しが使われていたとしてもそれはいかにも漢文訓読風であり、語史の順序が逆ではないかということであった。すなわち、先に「あたふべし」という和語の表現があってそこから「可能」という語が生じたのではなく、むしろ、中国語の「可能」をアタフベシと訓読していたのをあるところからやめてカノウと音読するようになった、それによって「かのう」の語が成立したのではないかということであった。

『附音挿図英和字彙』には確かに次のように「アタフベキ」というルビを添えられた「可能」

⁶ 惣郷・飛田では möglichkeit とすべて小文字で表記されているが訂正した。

⁷ 惣郷・飛田では『普通術語辞彙』の「(第一)」「(第二)」が「①」「②」と書き換えられているが、正しく読み下せるよう原文の形に戻して引用した。「欠いで」は原文で実際そのように印刷されているものである。

が現れる。以後、日中両語とも、辞書からの引用に関しては語の発音に関わる記述は一律に省く。その点以外は無理のない範囲で原本の表記、体裁を再現する。また、引用中の漢字は原則として現代日本の字体による。

Compatibility *n.* 可能^{トスルベキ}ノム、可成^{トスルベキ}立^{トスルベキ}ノム

Possibility *n.* 可能^{トスルベキ}ノム、可成^{トスルベキ}ノム

Potential *n.* 可能^{トスルベキ}ノム、可成^{トスルベキ}ノム

(柴田昌吉・子安峻^{まさきち たかし}編『附音挿図英和字彙』、1873（明治6）年）

問題はこの「可能^{アタフベキ}」をどう解釈するかである。『附音挿図英和字彙』においては上記の3語に加えて feasibility の項目にも「可能」は現れるが、そこでは「可能^{デクベキ}コト、可做得^{ナシウベキ}コト、可被行^{オコナハルベキ}コト」と記され、読みはデクベキである。また、入華宣教師サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズの著した英華辞典『英華韻府歴階』（後出）の付訓本では「可能」はヨクスベキと読まれている。

Capability, 可能^{トスルベキ}ノム○堪^{トスルベキ}得^{トスルベキ}ノム

Feasible, 可能^{トスルベキ}ノム

Possible, 可能^{トスルベキ}ノム

(斯維爾士維廉士著、衛三畏^{やなぎさわしんだい}鑑定⁸、柳沢信大校正訓点『英華字彙』、1869（明治2）年）

『附音挿図英和字彙』の引用中には「可成^{デクベキ}」という表現も見えるが、村上英俊^{ひでとし}『三語便覧』も次のように possible を「可成」と訳し、デキベキという読みを与えている。辞書名に含まれる「三語」は仏英蘭の3言語を指す。ここでは英語の語が誤って副詞形で示されている。

可能^{トスルベキ} possible, possibly, mogelijk

不可^{トスルベキ} impossible, impossibly, onmogelijk

(村上英俊『三語便覧』、1854（嘉永7）年）

ほかに、W. H. Medhurst *An English and Japanese, and Japanese and English Vocabulary*

8 この原作者名名の表示は奇妙である。「斯維爾士維廉士」も「衛三畏」もともにウィリアムズの名の音訳表記だからである。原著に鑑定者の表示は無論ない。また、実際には「英斯維爾士維廉士著」「清衛三畏鑑定」と表示されているが、ウィリアムズは英国人でも清国人でもなく、米国人である。以上のような多重の誤りが偶然によって生じるとは考えがたく、付訓本の出版者が原著の信頼性を印象付けるために考案した虚偽の表示ではないかとも憶測される。

(1830 (道光 10) 年) は possible を「デクルベキ」、Hori Tatsnoskay (堀達之助)『英和对訳袖珍辞書』(1862 (文久 2) 年) は「出来ベキ」と訳し、K. S. Asome (岸田吟香)『和訳英語聯珠』(1873 (明治 6) 年) は possibility を「出来ベキコト」と訳すなどしている。

以上のような表記や読みの状況から考えて、『附音挿図英和字彙』における「可能」を「あたふべき」という和語の漢字表記と見たのは惣郷・飛田の短絡的な解釈と言うべきであろう。実際のところは、「可能」は、中国から漢籍や英華辞典を通じてもたらされた「可能」を日本人がヨクスベシ、アタフベシと訓読し⁹、あるいは、デキベシ、デク(ル)ベシと読んで理解していた、単にその複数通りの読み方の1つを示すものであろう。そして、日本語の語順に合わず、本来「可能^{ベキ}」のように語順を変えて読まなければ通じない「可能」を、語の逆転を省いてそのままカノウと音読して一語化した、それが「可能^{かのう}」という語であると考えられる。¹⁰

日本語の語順に合わない中国語の表現を転置せずそのまま音読することによって作られた語を「直読語」と呼ぶとすれば、直読語は日本語に無数にある。そのうちで接頭辞的な要素を含むものには例えば「不要」「未定」「非常」「無上」「可変」「不可欠」のようなものがある。筆者の理解によれば、「可能」はそのような直読語の1つにほかならない。¹¹

⁹ ヨクスベシとアタフベシの関係について言えば、山田(1935)は漢文において「能」は「不」「弗」「未」を冠する場合にはアタハズ、アタハザルと読み、それ以外の文脈ではヨクと読むのが通例だとしている。実際、狭い確認の範囲では18世紀までの訓点資料に「可能」をアタフベシと読ませているものはない。¹⁰ 「可能」がヨクスベキ、アタフベキ、デキベキ、デク(ル)ベキなどと幾通りにも読まれ、デキベキが「可能」「可成」「出来ベキ」の読みとされるなど、漢字表記と読みは1対1の関係にないわけであるが、そもそも当時の英和辞典の訳語における振り仮名は必ずしも漢字表記の読みを表していたわけではない。『附音挿図英和字彙』の冒頭付近に目を通すだけでも、「不成ノ」(abortiveの項目)、「快活ノ」(agreeable)、「嫌悪スル」(abhor)、「省略サレタル」(abbreviated)のような例が多数見出される。そのような振り仮名は漢語の発音を示すものではなく、その意味を説明するために加えられているものと言える。実際、ウィリアムズの『英華字彙』巻頭の凡例には「(華字)右側二国字ヲ副スル者或ハ字音ヲ記ス有リ、或ハ字義ヲ釈スル有リ。読者之ヲ審カニセヨ。」との説明と指示がある。

英和辞典の語釈が時代の進行とともに意味の解説から訳語の提示に移行していったこと、そして、初期の辞典では振り仮名を含め語釈の提示法が多様であったことに関してはつとに森岡(1955, 1965)、森岡・伊藤(1966)、森(1967)などに指摘と考察がある。

¹¹ 文法的要素を含む直読語もその要素や個々の語によって成立や使用の時期が異なると見られる。岡野英太郎『明治漢語字典』(1896 (明治 29) 年)——巻頭の凡例によれば「民間日用ノ漢語ヲ網羅シ都鄙ヲ論セス老幼ヲ問ハス普ク其意ヲ会得セシムル」ことを目的としている——には否定の「不」「未」「非」「無」で始まる直読語は多数挙げられているが(「不可」「不能」「不明」「未定」「未明」「未遂」「非凡」「非礼」「非道」「無論」「無実」「無欲」など)、「可」で始まる直読語は「可憐」と今では使われない「可嘆(ナゲカハシ)」が挙げられているだけである。現代の辞書には「可」で始まる直読語として「可憐」以外に「可決」「可変」「可逆」「可分」「可視」などを含む多数の語が載っている。『明治漢語字典』に記載のある直読語で「可嘆」と同じくもはや廃れたものには例えば「不廉(ネカタカキコト)」「未行(マダマコナハス)」「無算(カゾヘラレヌ)」「非度(ホウニハヅレル)」などがある。

なお、本文中で“日本語の語順に合わない中国語の表現を転置せずそのまま音読することによって作られた語”を「直読語」と呼んだが、実際には概念、名称ともに精密化の余地がある。そうした本来的な直読語の延長線上には、「未着」「非核(三原則)」「無粹」のようにおそらく日本語で構成された語や、

惣郷・飛田の説にはまた、「あたふべし」が文献に現れる時代にあつて、なぜ「あたふ」でなく推量の助動詞「べし」を添えて「あたふべし」としなければならなかったのかという疑問もある。「できる」という意味を表すには「あたふ」だけでよく、「べし」は無用のはずである。「あたふべし」が単に中国語の「可能」を逐字的に日本語に移すことによって構成された表現だとすれば、その不自然さに関する疑問も解消する。¹²

以上が日本語の「可能」の由来に関して筆者の推定するところであるが、単に特定の入華宣教師の編んだ英華字典に「可能」が訳語として載っているというだけのことであれば心許ない。使用範囲の限られた特殊な表現に過ぎなかった可能性も考えられるからである。しかし、19世紀の中国語で「可能」の語は、中国における従来の記述に反して、実際広く使われていた。そのことは後に当時の文献の調査に基づいて明らかにする。¹³

3.3 中国語の「可能」の変遷に関する諸説

中国語の「可能」の語史についてはいくつかの記述と考察がある。¹⁴

さらには「不仲」「不確か」「未払い」「非ステロイド」「無アクセント」のような混種語も存在するからである。

¹² 惣郷・飛田の記述にはさらに、『哲学字彙』では「可能」が意味上無縁に感じられる virtual の訳語として示されていることの意味を考えることもなくただ「可能」の2字語が現れているというだけで現代の「可能」に結び付けているという問題もある。これについては、事情を確かめてみたところ、過去の英語においては virtual に“能力がある”などの意味があったことが判明した。例えば、19世紀前半に出た Noah Webster *A Dictionary of the English Language* では virtual は “Potential; having the power of acting or of invisible efficacy without the material or sensible part.” などと説明されており、現代英語では廃れた意味を表していたことが知られる。こうした語義が後出のロブシャイトの英華辞典の訳語を通じて日本に伝わり、『哲学字彙』の記述に反映されたものと見られる。

¹³ 参考までに付言しておく、明治初年前後のあらゆる英語辞典が possible などの語に「可能」「あたふべし」「よくすべし」のような漢文系の訳語を与えているわけではない。西洋人の編纂した英和辞典、すなわち、J. C. ヘボンの『和英語林集成』の各版（1867（慶応3）年～）の英和の部およびアーネスト・サトウの Ernest Mason Satow and Ishibashi Masataka *An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language*（1876（明治9）年）は can, may, possible を「できる」「～ことができる」「～てもよい」「～だろう」などの平易な和語の表現に訳している。日本人の編んだ辞書の中にも同様の語釈の方針によっているものがある。

¹⁴ 中国語の「可能」の用法には日本語の知識で類推できる面とそうでない面とがある。ここに、筆者なりの理解に基づいて、現代中国語の「可能」の用法の概略を日本語との対比の形で簡単に述べておく。

一般に「可能」には3ないし4種類の用法があるとされる。そのうちの2つは日本語に当てはめて言えば形容動詞および名詞としての用法である。形容動詞的用法は叙述（“可能だ”）や名詞の形容（“可能な”）をなすものである。名詞用法は「有可能」（“可能性がある”）などの形で使われるもので、「可能性」と言い換えることもできる。いずれの用法も日本語の「可能（性）」からの類推でおおむね理解することができる。

以上の2用法以外の用法における「可能」は論者によって助動詞とも副詞ともされる。動詞の直前あるいは文頭などに置かれて、“～することが可能である、～する可能性がある、～することがある”のように論理的可能性を述べるのに使われるほか、日本語の「～だろう」「～かも知れない」「たぶん～」「もしかしたら～」などに相当する話者の推測を表す。前者の用法は日本語の「可能（性）」からの類推で理解できるが、後者の推測の表示については日本語の「可能」には同様の用法がない。両様の用法は相

相対的に早い時期の記述としては『漢語大詞典』第3巻（漢語大詞典出版社、1989年）があり、そこには次のように記されている。

【可能】

- ①表示可以实现。《礼記·祭義》：“養可能也，敬為難。”孔穎達疏：“供養父母可能為也，但尊敬父母是為難也。”洪深《電影戲劇的編劇方法》第一章：“真正不表示態度的文芸，事实上是不可能的。”
- ②能否。五代齊己《聞沈彬赴吳都請辟》詩：“可能更憶相尋夜，雪滿諸峰火一炬？”清顧炎武《不其山》詩：“為問黃巾滿天下，可能容得鄭康成？”清黃遵憲《雁》詩：“可能滄海外，代寄故人書？”
- ③也許。唐韓偓《偶題》詩：“蕭艾軫肥蘭蕙瘦，可能天亦妬馨香！”宋李清照《漁家傲》詞之二：“造化可能偏有意，故教明月玲瓏地！”巴金《里昂》：“一位女主人在席上遞給我一件禮物，可能是一本書，一本畫冊，或者一本照相簿。”
- ④能成事实的属性：可能性。巴金《滅亡》第五章：“要不是杜大心昨天親眼在這裡看見那件事，那麼他一定不相信會有發生慘劇的可能。”楊朔《征塵》：“戰士的腳步也顯得搖晃不定，似乎隨時都有被大風吹倒的可能。”

ここに「可能」の語史に関する記述はないが、4つの用法がほぼ執筆者の考える発生順に示されているものと見られる。それによれば、①の「可以实现」（「実現することができる」）ということを表す用法が最も古く、次いで②の「能否」（「できるかどうか」）という疑問を表す用法と、③の「也許」（「もしかしたら～、～かも知れない」）という話者の推測を表す用法が生じたことになる。④の名詞としての「可能」の使用は近現代だけの現象である。なお、②の用法における「可能」の「可」は江（1990）によれば「一種推度詢問の語気」——“ある種の推測、質問の気持ち”——を表す副詞である。

『漢語大詞典』では論理的可能性を表す用法が認定されていない。①に含められている、③に含められている、同辞典はその用法を記述していない、という3通りの解釈が考えられる。以後の議論において同辞典の用法の番号に言及する都合上、ここでは論理的可能性を表す用法が①に含められているものと解釈する。異なる解釈によれば用法番号に関わる論述を適宜読み替える必要が生じるが、この小論の論旨には影響しない。

筆者の把握の限りにおいて、中国語の「可能」の語史に関する考察で検討の対象とすべきものは董（2002）、朱（2006）、胡（2014）の3つである。いずれにおいても、考察の主眼は

異なる2つのものと見なされていることもあるが、区別せず1つの用法として扱われていることも多い。

話者の推測を表す用法がどのような経緯で生じたかという問題に置かれている。そして、3つの考察はそれぞれ相容れない見解を結論としている。

董（2002）は中国語における2字語の発生と展開を広く主題とする論考であるが、“助動詞構文の語彙化”を論じた箇所に「可能」に関する短い考察がある。董によれば、「可能」は元來助動詞「可」と動詞「能」の組み合わせであり、“なし得る、行うことができる”という意味を表していたが、後ろに動詞句を伴って“～することができる”という意味を表すようになり、その後“～だろう、～かも知れない”という推測を表す助動詞として一語化した。何かを行うことができるというのは必ずしもその実現を含意しないという意味において非現実的であり、そこからやはり非現実の性質を持つ推測の用法が生まれたと董は説明する。董の見解は、『漢語大詞典』の記述に当てはめて言えば、用法①から③が派生したとするものである。董（2002）の改訂版である董（2011）では推測を表す「可能」の品詞が助動詞から副詞に改められているが、語史の議論に関わる実質的な変更はない。楊（2012）にも董と同様の見方が述べられている。

朱（2006）はまず、現代語における話者の推測を表す「可能」の用法は理論上は能力や論理的可能性¹⁵を表す用法から派生したものとも考え得るが、実際には両者のあいだにそうした関連はないとする。なぜならば、推測を表す「可能」の用法は現代になってから出現したものであり¹⁶、中古以後は能力や論理的可能性を表す用法があまり見られない、現代から見て直近の清代の『紅樓夢』その他の数百万字の資料を調べてみてもその種の用例は1例しか見出せなかった、そのような稀な用法が「可能」の現代語における推測の用法を生み出したとは考えられない、と朱は言う。

かくして朱は『漢語大詞典』の用法①から③への展開を否定し、それに代わる解釈として、用法③は②から生じたとする見方を提示する。朱は江（2000）——上で触れた江（1990）に内容は共通する——の指摘した推測、質問を表す副詞「可」の存在に言及し、明清代の白話小説にはそれが大量に現れ、そうした「可」に「能」が続いた表現は現代の推測を表す「可能」と同じく“話者の主観的な推測の態度”を示す、特に文末に終助詞の「麼」または否定辞の「否」が添えられて疑問文であることが明示されているときは“「可」の推測、質問の色彩が大幅に弱まる”などとし、そのような「可+能」の言い回しこそが現代の「可能」の推測の用法の直接的な来源である——論理の展開が筆者にはよく理解できないのであるが——と結論付ける。

15 朱は「中性可能性」とするが、筆者の論理的可能性と同等と見て言い換える。

16 朱はこのように「可能」の推測義の発生を現代とするが、『漢語大詞典』の記述によれば③の推測義は唐代から用例が見られる。しかし、古い用例を挙げている後者が正しいと単純に言えるわけではない。『漢語大詞典』の当該の用例を含め、「可能」を含む用例の解釈は論者によって食い違うことがあるからである。

胡（2014）は、唐代以後は『漢語大詞典』の用法①の用例が非常に少なく、胡の挙げる16件の用例でほぼ尽くされていると述べ、したがって、朱（2006）と同じく、そこから③への派生の過程は考えにくいとする。

そのうえで胡は、用法③の発生時期が調査によって明らかになったと述べる。すなわち、胡によれば、清朝末期から中華民国初期にかけての文献に形容詞、副詞、名詞として使われた「可能」が同時に大量に出現し、それまでは見られなかった「可能性」と使用頻度の低かった「不可能」も出現する。そして、それらは当時の進歩的な雑誌に現れる。胡はそれらのことに基づき、『日本国語大辞典』などの記述にも言及しつつ、用法③の「可能」は日本語からの借用語であると結論付ける。董（2002）と朱（2006）が「可能」の新用法の発生を中国語の内部で完結した現象として説明しようとしたのに対し、胡（2014）はそれを外的な要因によってもたらされた現象と考えたことになる。

以上の3つの説以外にも、李（2011）が“現代における「可能」の爆発的な発展は西洋語の翻訳の影響だろう”と述べているが、それ以上の議論はない。いずれにせよ、李の言う“発展”は「可能」の単なる使用頻度の増加を指しており、「可能」の用法の変遷とは直接に関係しない。

3.4 中国語の「可能」に関する諸説の検討

推測を表す「可能」の由来について董（2002）、朱（2006）、胡（2014）のようにまったく相異なる見解が主張されるという事実自体が、問題のむずかしさを物語っていると言える。そして、各論者が少数の用例の観察に基づき、あとは推測によって論を組み立てるとすれば、多様な解釈が生じるのも当然である。

まず言えることとして、“～することがあり得る、～でないとは限らない”のように論理的可能性を述べることと、“たぶん～する、もしかしたら～だ”のように話者の推測を述べるものが表現上非常に近い関係にあることは自明である。その意味において、少なくとも理屈のうえでは、『漢語大詞典』の用法で言えば①——論理的可能性を表す用法がそこに含まれるとの仮定で——から③が派生したと見るのが最も自然な解釈である。董（2002）も推測義の発生を①から③への派生と見ているが、推測義を論理的可能性ではなく実現条件の充足と結び付けようとするのは意味的に隔たりが大きい。

ところが、朱は、古代には能力や論理的可能性を表す「可能」という言い回しがあったが、中古以後はその用例があまり見られず、したがって、用法①から③への派生は考えられないと言う。それに関しては胡の論もおおむね一致する。¹⁷ 実際、論理的可能性や推測を表す「可

¹⁷ ただし、朱は古代の「可能」が能力ないし論理的可能性を表すとするのに対し、胡においては論理的可能性を表す用法には言及がない。その意味において両者の記述は完全に一致するわけではない。

能」の近現代の用例として朱と胡が挙げるのは20世紀開始後のものばかりである。しかし、中国語の「可能」の用法には果たしてそのような歴史的な断続が実際にあったのか。

筆者の調査によれば、少なくとも19世紀の中国語資料には、朱や胡の記述に反して、実現条件の充足や論理的可能性を表す「可能」の用例が豊富に見出される（次節）。そのことに基づいて筆者は、現代中国語の「可能」の用法は基本的に中国語に古くからあった実現条件の充足や論理的可能性を表す用法の継承であり、そして、過去の中国語に「可能」の用例を見出しにくいとすればそれは方言や文体の点で使用が限られていたために文献に残りにくかったということではないかと推定する。

ただし、20世紀に入ってそのような「可能」にめざましい普及と多機能化がもたらされたことは事実であり、そして、後に見るようにそれが日清戦争後における日本語の影響によるものであったことは確実である。その限りにおいて胡（2014）の議論は正しい。しかし、話者の推測を表す用法が日本語の影響によって生じたとする胡の見解には無理がある。胡は胡（2014）の英訳であるHu（2015）において日本語の「あたふべき」の意味を“probably, maybe”と説明しているが、言うまでもなく「あたふべき」は副詞ではなく、そのような意味を表すこともない。「あたふべき」の意味は“できる”——正確に言えば、“できるであろう、できるはずの”——ということである。そして、日本語で、アタフベキという読みを添えられた「可能」が話者の推測の表現に使われていたという事実もない。したがって、「可能」の推測義が日本語から中国語に伝わったということはある得ない。筆者は、「可能」の推測義は、日本語の影響によって「可能」の使用が増幅される中で、中国語の内発的な変化として論理的可能性の意味から派生したものと推定する。

4 19世紀中国における「可能」の使用状況

19世紀には多数のプロテスタント宣教師がヨーロッパから中国に渡って布教活動を展開した。概して口語性の高い彼らの著作には、おそらく伝統的な文体には適さなかった「可能」が頻繁に現れる。

ここでは宣教師による著作を主な資料として、19世紀初頭から、同世紀後半に日本語で「可能」という語が使われ始めたころにかけての中国における「可能」の使用状況を観察する。これにより、日本でも出版された英華辞典に記載された「可能」が使用の限られた表現ではなかったことが確かめられるとともに、19世紀の中国語で「可能」がどのように使われていたかを具体的に知ることができる。

4.1 『啖咭喇国新出種痘奇書』

調査によって確認できた限りでは、西洋との関わりを有する中国資料のうちで年代を特定できるものにおける「可能」の最初の出現は、19世紀の初頭、プロテスタント宣教師の到来よりもわずかに早い1805（嘉慶10）年に刊行された小冊子『啖咭喇国新出種痘奇書』に見出される。同冊子は、18世紀末の英国で医師エドワード・ジェンナー（Edward Jenner, 1749～1823）によって開発され、最終的には世界を天然痘の撲滅に導いた牛痘接種法を紹介するものである。

以後、用例の引用に際しては、句読点の類を中心とする形式上の調整を施す。また、中国資料における用例については「可能」の解釈を示すのに必要な最小程度の日本語部分訳を添える。

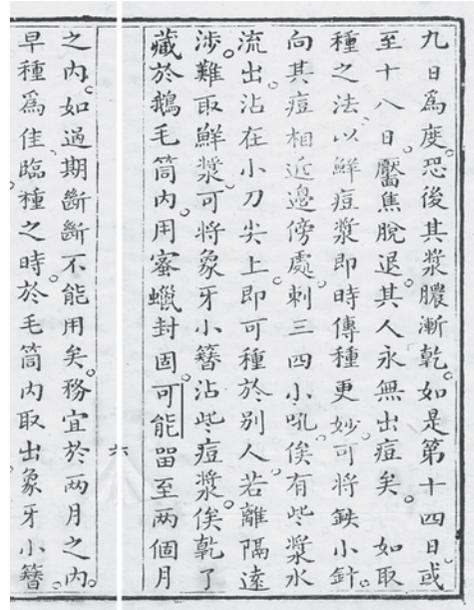


図1 啖咭喇輯『啖咭喇国新出種痘奇書』

若離隔遠涉難取鮮漿，可将象牙小簪沾些痘漿，俟乾了藏於鵝毛筒內用蜜蠟封固，可能留至兩個月之內，如過期斷斷不能用矣。（象牙の小さなかんざしに少量の痘漿を付着させ、乾くの待って鵝鳥の羽柄中に蜜蠟を使って密封すれば、最長2か月間保存することができる。）

（啖咭喇輯、噉咭訂、嘶嚙唻繙訳『啖咭喇国新出種痘奇書』、1805（嘉慶10）年）

『種痘奇書』の編集者として表示されている「啖咭喇」は英国東インド会社の広東における貿易責任者であるジェームズ・ドラモンド（James Drummond）、修訂者の「噉咭」は同社の医師アレクサンダー・ピアソン（Alexander Pearson）、翻訳者の「嘶嚙唻」は同社で書記、通訳、工場長などを務めたジョージ・トーマス・ストーントン（George Thomas Staunton）である（陳（1908）、Wong and Wu（1932）、田崎（1994））¹⁸

¹⁸ 著作者は冊子末に「啖咭喇国公班衙命来広統撰大班貿易事務啖咭喇敬輯」「啖咭喇国公班衙命来広医学噉咭敬訂」「啖咭喇国世襲男爵前乾隆五十八年随本国使臣入京朝覲現理公班衙事務嘶嚙唻敬繙訳」と表示されている。

田崎（1994）は「イギリス東印度会社の広東の代表である Drummond の名は、『奇書』の刊行が東印度会社の公的なかわりによるものであることを示すものであろう。」と述べている。しかし、『重修南海県志』巻四十四「雑録二」（1835（道光15）年、富文斎）には「牛痘之方啖咭喇蕃商啖咭喇於嘉慶十

翻訳者のストーンンは1793（乾隆56）年、12歳のときに外交官の父に随って中国に渡った英国人である（出航は前年）。出発前および渡航の船上で中国語を学んで早い上達を示し、英国使節の乾隆帝謁見時には中国語で話すことのできる使節中唯一の人物であった。ストーンンには『種痘奇書』以外にも中国に関する複数の著作や『大清律例』の英訳がある（Lee (ed.) (1898)）。

4.2 モリソンの著作・翻訳

『種痘奇書』刊行の2年後の1807（嘉慶12）年にはロンドン伝道協会（The London Missionary Society）によって派遣された英国人宣教師ロバート・モリソン（Robert Morrison, 1782～1834、中国名馬礼遜）が中国初のプロテスタント宣教師として広州に到着する。モリソンは清朝の禁教政策の悪条件のもとで、ストーンンそして英国東インド会社の支援を受けて、聖書を訳し辞書を編むなど精力的な著作・出版活動を展開する。¹⁹

モリソンの著作には「可能」がしばしば出現する。まず到着の数年後に出版された新訳聖書の翻訳ほかのキリスト教関係の著作における用例の一部を示せば次の通りである。

又誰可能以挂慮而加厥生命一尺乎。（誰が思いわずらったからとて自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか。）

惟耶穌答之曰：爾非明知所求也。我將飲之杯爾能飲之乎。又我將受之浸爾能受之乎。伊等謂之曰：我們可能也。（イエスは答えて言った。「あなた方は私が飲む杯を飲むことができるか。また私が受ける洗礼を受けることができるか。」彼らは「できます」と答えた。）

（『耶穌基利士督我主救者新遺詔書』第一本「聖馬竇傳福音書」、1813（嘉慶18）年）
謂伊等曰：我心極悶致死，爾等此處醒守。且其前走些俯伏地祈禱，欲或可能即要得救出于當時候。（イエスは）少し進んで地にひれ伏し、「できることならこの時から救い出してくださいように」と祈った。）

（『耶穌基利士督我主救者新遺詔書』第二本「聖馬耳可傳福音書」、1813（嘉慶18）年）
因是言如大輩內有分別。且多曰：其懷魔發顛狂，而為何聽之。別人曰：斯並非懷魔者之

年携至粵東其法。（牛痘法は英国商ドラモンドが嘉慶10年に広東に運び伝えた。）、『重修広州府志』卷百六十三「雜錄四」（1879（光緒5）年、富文齋）には「乾隆間蕃商咄咄携牛痘種至粵。（乾隆年間に外国商ドラモンドが牛痘ワクチンを広東に運び伝えた。）」とあり、ドラモンドは牛痘法、ワクチンを中国に将来するうえで重要な役割を果たしたという事実があって名を連ねたものと見られる。ドラモンドが同書の内容の準備に実質的に関与したかどうかは確認のすべがない。
19 3部構成、計6分冊より成るモリソンの辞書（後出）を出版するために英国東インド会社は1814年に印刷所 The Honorable East India Company's Press をマカオに設立し、英字と漢字が入り交じって現れる辞書を印刷できるよう漢字の鉛活字を鑄造した（Colburn (1815)、蘇 (2000, 2014)、譚 (2011)）。印刷所設立の翌年には辞書の最初の1冊が刊行されており、大部の辞書ながら執筆のみならず製版と印刷も驚異的なペースで進められたと言える。

言、魔可能開瞽之目乎。(ほかの人たちは言った。「それは悪霊に取り憑かれた者の言葉ではない。悪霊に盲人の目を開くことができようか。」)

(『耶穌基利士督我主救者新遺詔書』第四本「^(ヨハネ)聖若翰伝福音書」、1813(嘉慶18)年) 至聖録之難通²⁰一件、倘有人弱然不能食大飼、他尚且可能哺其甘且嫩乳。至其余、則暫時遺下、待他越發加力、而得至尤多之見識。(人に体力がなく多く食べられなくても、聖書はその人に甘く新鮮な乳を飲ませることはできる。) (『勸読聖録熟知文』、1812(嘉慶17)年²¹) 某到加利古打後、即起意要学該处的字語、因早觉得以遊学者、只用眼看不甚濟事、必要念一国之書及同上一派之人交接叙晤、方可略明其处之得失。依斯看来、余即請人指教、並自家早晚攻書。如此学待過了一年有余、方可能頗曉該处各書内之義也。(このようにして学びつつ1年余り過ぎてようやく、当地の書物の意味が一通り理解できるようになった。)

(塵遊居士²²『西遊地球聞見略伝』、1819(嘉慶24)年)

調査の限りにおいて、著作や翻訳に歴史を通じて初めて「可能」を用いた入華宣教師はモリソンである。モリソンは英国出発前に大英博物館にあった翻訳者不明の漢訳新約聖書の写本——四福音書の内容を1つの物語に仕立てた「四福音書の調和」(A Harmony of the Gospels)、「使徒行伝」(The Acts of the Apostles)などを含む——を中国人の助力を得て書写して携行し、自身の聖書翻訳の基礎として利用しており(Lord(1813a)、E. Morrison(1839)、Moseley(1842))、そして、当時は不明だったその翻訳者がフランスのカトリック宣教師ジャン・バセ(Jean Basset、1645ごろ～1715、巴設、白日昇)であることが後年明らかにされているが(Willeke(1945))²³、確認の限りではモリソンの書写したバセの翻訳に「可能」は現れない。また、モリソンより一足先に(曹(2010))バプティスト派英国人宣教師ジョシュア・マーシュマン(Joshua Marshman、1768～1837、馬士曼)がインドのセランプルで漢訳聖書を出版しており、モリソンと同じく大英博物館蔵の漢訳聖書の写本を利用していることが知られているが(Wherry(1890))²⁴、マーシュマンの翻訳にも「可能」は現れない。したがって、モリソンの翻訳における「可能」はモリソンが積極的に選んだ表現であることになる。

²⁰ 「通」は原文では「道」。文脈上誤刻と見て訂正した。

²¹ 刊行年はウェブ上で公開されたオックスフォード大学ボドリアン図書館の蔵書目録における推定による。

²² 「塵遊居士」は該書におけるモリソンの筆名。以後この種の注記は省く。

²³ Lord(1813b)には、“文体から翻訳が(1人の)中国人によるものであることが(モリソンに)分かった”という記述がある。翻訳者をバセとする見解と表面上対立するが、おそらくバセによる訳文を1人または複数の中国人が修正するという方法で翻訳が行われたということであろう。

²⁴ Wherryは、“モリソンとマーシュマンの翻訳を比較すると、少なくとも新約聖書に関しては表現の一致が非常に多く、共通の基礎を想定せざるを得ない。それは疑いの余地なく大英博物館の写本であった。”と述べている。

モリソンの執筆による辞書や語学書にも「可能」は現れる。華英辞典では「可」の項目、英華辞典では can、capable などの項目に「可能」が現れる。以後書名が長い場合は適宜短縮して示す。

可 To have liberty to do; to be permitted; to have the power of doing. (中略) 可不可
 'May it be done or not.' 可也 'It may; it is permitted; it will do.' 不可 'it may not, it
 must not; it cannot.' (中略) 可以 'May.' 可能 'Can.' (後略)

(Robert Morrison *A Dictionary of the Chinese Language in Three Parts,*
Part I, Volume I: Chinese and English 『字典』、1815 (嘉慶 20) 年)

CAN, to be able, 能. (中略) Can you buy a book for me, 你可能替我買一本書. (後略)

CAPABLE, 可能. He is capable of doing, 他可能做.

COULD, is made by 能; 可能.

INCOMPREHENSIBLE (中略) Incomprehensible, 非心思可能度量.

(Robert Morrison *A Dictionary of the Chinese Language in Three Parts,*
Part III: English and Chinese, 1822 (道光 2) 年)

中国語の文法書『通用漢言之法』と中国人のための英文法書『英吉利文話之凡例』では動詞の potential mood や助動詞 can、could に関わる例文や説明に「可能」が現れる。イタリック体の使用が無原則で統一しにくいので、原文の通りに引用する。

[THE VERB - POTENTIAL MOOD]

我可能有 'I can have.'

他可能有那件宝石 'He can have that precious stone.'

他豈不可能有先生教乎 'How can he not have a master to teach him?'

你上年可能有買田十畝每畝銀三十兩 'Last year you *could have* bought ten Mow of land
 at 30 tales per Mow.'

令尊在時你可能有得過好趣地方居住 'When your father was alive, you *could have* had
 a very pleasant place to live in.'

我前箇月可能買了許多茶葉惟當時不得知道你的主意如何 'The month before last I *could*
 have had bought a great quantity of tea, but I did not then know what your
 determination was.'

那時之前若他歡喜有如此行豈不可能去辦乎 'If before that time he had pleased to act
 thus, why *could* he not have had done it?'

他們明天可能到此處 'They can be here to-morrow.'

若他情願他可能為好跟班 'If he pleased he could be a good servant.'

他昨天午時可能得到前山麼 'Could he be at Tseen-shan yesterday at 12 o'clock?'

他從前可能到那處亦未定 'He may have been there formerly; it is uncertain.'

他前天可能得到那處 'He might have been there the day before yesterday.'

若他今早勤做工夫到午時他可能辦明白了 'If he had worked diligently in the morning, he could have been done by 12 o'clock.'

他昨晚可能在這裏麼 'Could he have been here last evening?'

[THE VERB - CAN; COULD]

'Can' is often made by 得. (中略) 'Can and could,' are also made by 可; 能; and 可能.

若你那時即有查過你可能得其實 'If you had examined at that time, you could have obtained the truth.'

(Robert Morrison *A Grammar of the Chinese Language* 『通用漢言之法』、1815 (嘉慶 20) 年)

If I were willing I could do it, 我若是情願就可能做得來.

I may or can aid, 我可能相助.

Could be aided, 可能被助. 被助得來.

(Robert Morrison *A Grammar of the English Language for the Use of the Anglo-Chinese College* 『英吉利文話之凡例』、1823 (道光 3) 年)

4.3 ミルンの著作・翻訳

「可能」はモリソン以後の多くの宣教師の著作にも現れる。まず、ロンドン伝道協会によってモリソンのもとに派遣された英国人宣教師ウィリアム・ミルン (William Milne, 1785 ~ 1822、米隣) も「可能」を多く使っている。

モリソンによる新約聖書の翻訳に引き続き、モリソンとミルンが共同で行った旧約聖書の翻訳における用例の一部は次の通りである。

我今有勢可能害爾, 惟昨夜爾父之神對我言云: 爾慎勿向牙可百說或好或歹也。(私は今あなた方に害を加えることのできる力を持っているが、あなた方の父の神が昨夜私に告げて、「おまえは心して、ヤコブによしあしを言うな」と言われた。)

時牙可百大惶心苦且將隨之之人與其群牲口及駝分為兩隊, 曰: (以叟若到一隊擊之, 所遣之隊可能脫逃。(そこでヤコブは人々、家畜、ラクダを2つの組に分けて言った。「たとえエサウが来て1つの組を攻撃しても残りの組は逃れることができる。」)

時以叟取厥諸妻、厥子輩、厥女連、家裏諸人又厥牲口、厥畜与在加南所獲諸物而往入其地離厥弟牙可百之面。蓋伊等財大於可能同住一所。（エサウは妻と子と娘と家の人々、家畜と獸、そしてカナンの地で得た諸々のものを携え、弟のヤコブを離れてその地に行った。彼らの財産が多くて同じところに住むことができなかったからである。）

（『神天上帝啓示旧遺詔書』第一本「創世歴代伝或称厄尼西書」、1823（道光3）年）
惟若其人無人代贖之，但己可能贖之，則許他算起売之多少年而以其余還先売与之之人，致該人可還之以他本業也。（しかし、自分でそれ（土地）を買い戻すことができるようになったならば、それを売ってからの年を数えて残りの金を土地を売った相手に返さなければならない。）

（『神天上帝啓示旧遺詔書』第三本「利未氏古書伝」、1823（道光3）年）
時若百答神主而曰：我知爾能成万事，且爾諸思之無一可能被阻也。（そこでヨブは主に答えて言った。「私は知っています、あなたはすべてのことを成すことができ、またいかなる思召しでもあなたにできないことはないことを。」）

（『神天上帝啓示旧遺詔書』第十一本「若百之書伝」、1823（道光3）年）
其以太比巫人可能変己皮膚乎。或其豹可变己斑²⁵点乎。倘然也，則爾等慣行悪，則可行善也。（エチオピアの人はその皮膚を変えることができますか。ヒョウはその斑点を変えることができますか。もしそれができるならば、悪に慣れたあなた方も善を行うことができます。）

（『神天上帝啓示旧遺詔書』第十五本「達未来者耶利米亜伝書」、1823（道光3）年）

次に示すのはそれ以外のミルンによる著作における「可能」の用例である。

問：你怎麼可能知道神而奉事之耶。○答曰：我应当敬読聖書一部、伝神之道理者而学之、然後可能知道真神而奉事之也。（どうすれば神を知り、神に仕えることができますか？——聖書を読んで神の道理を伝える人を敬い、そして見習いなさい。そうすれば、真の神を知り、神に仕えることができます。）

問：神所命你行、所禁你行者，你何能知道斯情呢。○答曰：以神之律法而可能知道斯情也。（神が人に命じることや禁じることをどのようにして知ることができますか？——神の律法によってそれを知ることができます。）（博愛者纂『幼学浅解問答』、1816（嘉慶21）年）

我等自然不能代人死以贖其罪，但我各人可能将神天之大道理而以之教训我本家、隣舍等。（我々はもちろん人に代わって死んで罪を贖うことはできないが、我々各人が神の道理によって家族や近隣の人々を教え諭すことはできる。）（博愛者纂『三宝仁会論』、1821（嘉慶25）年）

于諸智慧才幹者，指神天所賜与耶穌諸使徒之智与才，致伊等可能明然而宣真道与世上衆

²⁵「斑」は原文では「班」。

人也。(「諸智慧才幹」とは、神がイエスの弟子たちにたまわった知恵と才能を指す。弟子たちはそれによって真理の道を理解し世の人々に伝えることができる。)

救爾之福音者，言独福音之道理能示人知如何可能得救也。(「救爾之福音」とは、福音の道理だけがいかにして救いを得ることができるかを人に教えられるということを言う。)

(博愛者纂『新增聖書節解』、1825(道光5)年)

ミルンが編集・発行した月刊誌『察世俗每月統記伝』の記事にも「可能」は現れる。

総無未察而能審明之理。所以学者要勤功察世俗人道，致可能分是非善惡也。(学者は世俗人道をよく観察し、是非善惡を区別できるようにならなければならない。)

(「察世俗每月統記伝序」『察世俗每月統記伝』嘉慶乙亥年七月、1815(嘉慶20)年) 故信耶穌者不可相誑，又不可說誑於他人也。若是世上人因想得利敢犯神之誠而說誑，信者斷不可。若以講一句誑語即可能得國位、治天下，信者亦斷不可講那一句。(嘘の話をすることによって国王の位を得て天下を治めることができるとしても、イエスを信じる者は断じてそのような話をしてはならない。)

(「誑語之罪論」『察世俗每月統記伝』嘉慶丙子年閏六月、1816(嘉慶21)年) 若人可能鑿出一闌河致船隻相通彼兩海，搬運貨物而無所礙其路，則大有益也。(もし水路をうがち船舶が自由に2つの海を往来して貨物を運べるようにすることができれば、益は大きい。)

(「先行船沿亞非利加南崖論」^(アフリカ)『察世俗每月統記伝』道光辛巳年正月、1821(道光1)年)

4.4 メドハーストの著作

英国人宣教師ウォルター・ヘンリー・メドハースト(Walter Henry Medhurst, 1796～1857、麦都思)はミルンの助手として『察世俗每月統記伝』の刊行に助力し、ミルンの没後はその遺志を継いで月刊誌『特選撮要每月紀伝』を刊行した(卓1990)。

若人身体險病每日逾深，則総無等待病疾更危就尋出医生調治，乃疾速抄藥急服，致或可能免害。(病気がさらに重くなるのを待たず医師の診察を受けてすぐに薬を飲めば、害を免れることができるかも知れない。)

(「道德与發於心篇 第三回 論罪人既醒，該急求救路」

『特選撮要每月紀伝』道光甲申年六月、1824(道光4)年²⁶⁾)

我心諸念該常慕神，而日所想必時向之，即可能事天，而尽我之本分也。(常に神を慕い、神に向かい合わなければならない。それによって神に仕え、自分の本分を尽くすことができる。)

²⁶⁾ 用例の確認は『道德興發於心篇』(刊行年不詳)に再録された版による。出典は筆者の推定に基づく。

（尚徳者纂『神天之十條誠註明』、1832（道光12）年）

草木之生下等，只可生發長大，吐花結菓，惟弗能動身叫喊也。禽獸之生中等，其可生長
 伝後，可能動身尋食，叫喊成群，享福受苦，惟弗能通曉天理，不能記念思想。（動物は身
 を動かして食料を求め、声を出して群れを成し、幸福を享受し苦しみを受けることができる。）

（尚徳者纂『真理通道』、1845（道光25）年）

メドハーストによる英華辞典や語学書にも「可能」は現れる。

CAN, to be able, 能, 克; may, 可能, 可以, 能得（後略）

COMPETENT, fit, 合宜; sufficient 足用; capable, 可能, 能穀, 能事, 克堪;（後略）

COMPREHENSIBLE, intelligible, 知得的, 通得的, 可能通得.

EFFECTIVE, able to produce effects, 可能成事; efficient, 有用.

POSSIBLE, 可能, 做得来的, 行得的;（後略）

（Walter Henry Medhurst *English and Chinese Dictionary in Two Volumes*,
 1847 ~ 1848（道光27 ~ 28）年）

船可能出海麼? Can the boats go out to sea?

（Walter Henry Medhurst *Chinese Dialogues, Questions, and
 Familiar Sentences (Revised by His Son)*, 1863（同治2）年）

4.5 さまざまな宣教師の著作

ここには19世紀の前半から中盤にかけてのさまざまな宣教師による著作における「可能」
 の使用をまとめて掲げる。

神天之意甚深，無人可能測之，天道何能尽知也。（神の思し召しは非常に深く、それを推しは
 かることのできる人間はいない。）

凡宣聖道者宜敬讀細察深味保羅（パウロ）与弟摩忒（テモテ）兩本書，方可明白宣講正道之理而可能称善教化
 世人者也。（聖道を説く者はパウロとテモテの二書を読んで考え味わなければならない。そうして初
 めて正道の理を理解して説き、善を称え世人を教化することができる。）

耶穌自取人類之性而甘心受多艱難，致可能代贖凡信從其者之罪也。（イエスは人の性を取り、
 進んで多くの艱難を受ける。それにより、イエスはイエスを信じてそれに従うあらゆる者の罪を贖うこ
 とができる。）（種徳者（David Collie）纂『新纂聖道備全』、182?年²⁷）

²⁷ 刊行年の表示はベルリン州立図書館のウェブサイトに掲載された書誌情報による。

問：人靠着誰纔可能望脱去神天之大怒呢。○答曰：人要依耶穌代贖人罪，纔可能脱神天之公怒也。（人は誰に頼って神の怒りを免れることができますか？——イエスによる罪の代贖に頼って初めて神の怒りを免れることができます。）

問：因為耶穌代贖人罪，衆人可能得罪之赦否。○答曰：衆人該当篤信于耶穌代贖人罪，就可能得罪之赦也。（イエスが人の罪を代わって贖うので、人々は罪の赦しを得ることができますか？——イエスによる罪の代贖を心から信じなければなりません。そうすれば罪の赦しを得ることができます。）

（後学者（John Ince）纂『節録成章幼学問答』、182?年）

Paper can be made out of straw. 禾草可能作得紙出

((James Legge) *A Lexilogus of the English, Malay, and Chinese Languages*,

1841 (道光 21) 年)

次に示すのは月刊誌『遐邇貫珍』と週刊誌『中外新聞七日録』に見られる「可能」の用例である。

海參身長如革囊，兩頭皆通。孔口有花辺環之，可能尽縮入内。（ナマコの体は細長い革袋のようで、両端が相通じている。口の周囲には縁飾り（のような触手）があり、縮めて体内に収めることができる。）

（「続生物総論終」『遐邇貫珍』第3巻第4号、1855（咸豊5）年）

清水之源，来自遠山，長且闊也。川流不息，可能洗滌多衣之惡臭而有余。（中略）耶穌之身，来自天堂，神且聖也。功德全備，可能代贖多人之罪惡而有余。²⁸（川の流れは絶えることがなく、多くの衣服を洗ってきれいにすることができてなお余りがある。イエスの身には功德が完備しており、多くの人の罪を贖うことができてなお余りがある。）

（「上神之旨觀其釘身於架上不惜血軀」『中外新聞七日録』第7号、1865（同治4）年）
按此器能挑縫衣服手巾各物，快捷異常，計每日做服可能当女工之十。（この器械によって服やハンカチを縫えば非常に速く、毎日女工10人分の服を作ることができる。）

（「西国縫衣物器具図式」『中外新聞七日録』第68号、1866（同治5）年）

大英乃是近日富強之國，其識明見遠者諒不乏人，豈区区賭博之規銀可能動其心者。（英國は近年富強の國であり、達識遠見の人も多いであろう。どうして些細な賭博經營の報酬が彼らの心を動かすことができようか。）（「香港近聞」『中外新聞七日録』第130号、1867（同治6）年）

次はポルトガル人宣教師による葡華辞典における用例である。poder は英語の can や may、
“Pode isso ser?” は “Can (May) this be?” に相当する。²⁹

²⁸ 確認に用いた影印では一部の文字が欠けている。引用中の「息」「神」の2字は推定によって補った。

²⁹ 筆者によるポルトガル語の凡例の解説が誤っていなければ、「△」は以後の表現が高尚でもっぱら書

PODER v. 能。能穀。可 △ 克 (中略) Pode isso ser? 能穀有這樣的麼。豈有此理 △ 可能有此。能如此乎

(Joaquim Afonso Gonçalves *Diccionario Portuguez-China: No Estilo Vulgar Mandarin e Clássico Geral* 『洋漢合字彙』、1831 (道光 11) 年)

4.6 ウィリアムズ、ロプシャイトの辞書

日本で翻刻その他が刊行されたウィリアムズとロプシャイトの英華辞典にも「可能」は現れる。

米国人宣教師サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ (Samuel Wells Williams, 1812 ~ 1884、衛三畏) による英華辞典『英華韻府歴階』についてはすでにその付訓本における記述に言及したが (3.2)、その原文は次の通りである。付訓本との違いは訓点がないことと、ここでの引用では省いている中国語の発音の表記がある——「可能 kó nang」のように——ことだけである。

CAPABILITY, 可能; 担得.

FEASIBLE, 可能.

POSSIBLE, 可能.

(Samuel Wells Williams *An English and Chinese Vocabulary in the Court Dialect* 『英華韻府歴階』、1844 (道光 24) 年)

ドイツ人宣教師ヴィルヘルム・ロプシャイト (Wilhelm Lobscheid, 1822 ~ 1893、羅存徳) による『英華字典』は、2 段組の 4 分冊より成り、総ページ数が 2,000 ページを超える大著である。同辞典には多数の項目に「可能」が現れる。森岡 (1965) などに始まる多くの研究によって明らかにされている通り、近代日本語の語彙の形成に何よりも大きな影響を与えた重要な辞書であるので、確認できた「可能」の出現をすべて示す。³⁰

Abstractive, 可能除的.

Attainable, 可得, 可得到³¹, 可能得, 可入得, 可中得, 可及.

Can, to be able, 能, 能, 得, 克, 可, 可当, 可勝, 能得; (中略) can it be done? 做

き言葉で使われることを示す。「可能有此」という文のどの要素が書面語とされているのか筆者には判断が付かないが、「可能」が筆者の想像に反して書面語として捉えられている可能性があることになる。

³⁰ 辞書中の語句の調査には中央研究院近代史研究所の「近代史數位資料庫」(<http://mhdb.mh.sinica.edu.tw/>) に含まれる「英華字典資料庫」を利用した。

³¹ 「到」は原文では「倒」。誤植と見て訂正した。

得唔呢, 可能否; (後略)

Capable, having the requisite capacity or ability, 能, 得, 唉, 能幹, 儻, 賢能, 有才調, 有才幹, 疆, 疆幹, 疆能, 可能, 可以能, 可以得, 有本事, 有才能; capable of holding, as a vessel, 容納得, 可容納, 可能裝載; (後略)

Competent, adequate, 足, 够, 優; qualified, having legal capacity or power, 有權; ditto, having the necessary ability, 可以, 足以, 可能, 有本事, 才足, 能足, 才堪; (後略)

Comprehensible, capable of being understood, 曉得, 可能曉, 可通得; (後略)

Effective, efficacious, 有成効, 有勢子, 可能成功, 有徵驗, 有勢, 有力, 有用; (後略)

Enable, to make able, 俾能, 俾得, 使能, 致能, 使可能, 致可能; (中略) wealth enables a man to be liberal, 有錢財可能寬施; (中略) to enable one to do it 俾佢做得, 致能為之, 使他可能為之; (後略)

Equal, (中略) adequate, 足, 够, 可能, 能得, 可以, 做得; (中略) he is equal to the task, 佢可以做得, 佢可能做得; (後略)

Feasibility, 可得者, 可以者, 可能者; the feasibility of execution, 可以做得, 可以成得, 可能成之.

Feasible, 可得, 可以, 可能, 做得; (後略)

Licentiate, (中略) one who has a license to preach, 伝道者[‡], 有伝道之權者.

[‡] 可能伝道惟不敢施聖礼者.

May, to be able, 可, 可以, 能, 得, 做得, 可能, 可得; (後略)

Might, had power or liberty, 先已有權, 可以, 先時可得, 先時可能; (後略)

Possibility, 可能者, 做得來的,

Possible, 做得去, 做得嚟, 得, 能, 可能, 可得, 可有, 或者有; (後略)

Potential, 有權嘅, 唉能嘅, 能; existing in possibility, not in act, 可, 得, 可有, 可為; the potential mode 可能之式.

Qualification, natural endowment, 才能, 才幹, 本事, 可能; (後略)

Qualified, fitted by accomplishments &c., 可以做得, 可以能得, 才可以, 才幹可以, 足能, 可能; (後略)

Qualify, to furnish with knowledge, skill, &c., 教到能, 使可能; (後略)

Qualifying, 使合, 使可能, 致能, 使可得; (後略)

Sufficiency, 够, 穀, 足; competence, 能, 可能; (後略)

Virtual, having the power of acting, 可能, 有權; (後略)

(Wilhelm Lobscheid *English and Chinese Dictionary with the Punti*³² and *Mandarin Pronunciation* 『英華字典』、1866～1869 (同治5～8) 年)

ロブシャイトには華英辞典もあるが、そちらでは確認の限りにおいては「可能」は「可」の項目に一度現れるだけである。

可 can, may; worthy of; able to do, competent; proper, suitable, convenient; to permit; to be willing; 可能, can; 可以, may, can, possible; (後略)

(Wilhelm Lobscheid *A Chinese and English Dictionary* 『漢英字典』、1871 (同治10) 年)

4.7 中国人によるキリスト教関係の著作

中国人によるキリスト教関係の著作中にも「可能」は見出される。

次に示すのは、梁發³³ (1789～1855) の著した教義書『勸世良言』における「可能」の用例の一部である。梁發は広州で印刷技術を学び、モリソン、ミルンの聖書や『察世俗毎月統記伝』の出版を手伝い、中国人初のプロテスタント宣教師に任命された広東出身のキリスト教徒である (Wylie (1867)、McNeur (1934))。

蓋救主耶穌代受死贖罪奧妙之大道係神天上帝秘義之事, 世人見識卑微, 豈可能測之哉。(イエスの代贖の奥深い大道は神の秘義である。見識の乏しい世人にどうしてそれを推し量ることができようか。)

況且常生之永福亦非肉眼可能親見, 故雖有此常生之樂亦難得富人信從之。(まして不老不死の幸福は人の目で見ることができるものでもない。)

如今我不過以地上可能見之事講汝聽, 汝等猶不肯信之。我倘若以天上不能見之事情講汝知, 汝豈肯信之乎。(今私は目で見ることのできる地上のことで話しているだけなのにあなた方は信じようとしな。)

多有人一時不能就肯信服。這是什麼緣故。因為³⁴天地人物之事現在眼前可能觀看之。(中略) 至於降生救世主耶穌之事原在西漢末年之時。三代以上の書又未曾有說。眼前又不能見憑拋。(この世のことは目で見ることができるが、イエスの降誕については証拠を見ることもできな

³² 書名中の Punti は広東を表す「本地」の広東語読みで、“the Punti pronunciation” は広東語の発音を指す。本辞典は見出し語にも例文にも広東語と官話両様の発音を示している。

³³ 梁發は多数の名で呼ばれた。李撰 (1985) は「又名恭發 (或功發、公發、俗称梁阿發)」と説明している。

³⁴ 「為」は原文では「謂」。誤刻と見て訂正した。

いからである。)

故凡敬信救世主真經聖道福音之人亦必如嬰孩子之心，纔可能得靈魂之救也。(救世主の福音を敬い信じる者は皆幼な子のような心でいなければならない。そうして初めて靈魂の救いを得ることができる。)

(学善居士纂『勸世良言』、1832 (道光 12) 年)

4.8 宗教外の文脈における使用

4.2 から 4.7 にかけてキリスト教宣教師による著作や翻訳における「可能」の使用を見てきたが、宗教に関わらない各種の出版物にも「可能」は現れる。

次は米国で出版された、ポーランド人による中国語学習書における例である。この引用における「可能」は該書では「能可」と印刷されているが、本来「可能」とあるべきものの誤植と見て用例の 1 つに数えた。

You wish to study the English language. 你要学英喇呢話麼——Yes, but the English is a difficult language. 学是要学但英喇呢話難学——Not at all, a man of ability may by diligent study of five or six months learn a good deal of it. 没有一箇有本事的人用心五六箇月的工夫可能学多好了

(Stanislas HERNISZ *A Guide to Conversation in the English and Chinese Languages*,
1854 年)

同書の導入部には、“従来中国語はキリスト教布教のために、もしくは、少数の言語研究者の興味の対象として研究されるだけだったが、今や世界の状況が変化し、西洋人が中国語を学び、中国人が英語を学ぶことが必要になった”と述べられている。上の例も一般的な日常会話におけるやり取りとなっている。

中国人によって編まれた最初の英華辞典である鄺其照(1836～没年不詳、幼名全福³⁵)の『字典集成』にも「可能」は現れる。

Can 能, 克, 可能, 能得

Effective 可能成事, 有用

Possible 可能, 做得来的, 能得

(鄺全福選著『字典集成』、1868 (同治 7) 年)

書名が「集成」という表現を含むことの意味は同書の *An English and Chinese Lexicon Compiled in Part from Those of Morrison, Medhurst and Williams* という英語名から知ら

³⁵ 「全福」を幼名とする判断は高田 (2009) による。

れるが、上記の3語の記述に関しては訳語の選択と排列からメドハーストの英華辞典(4.4)によっていることが分かる。

譚達軒(生没年不詳、諱宴昌³⁶)による英語辞典と学習書には「可能」が鄭の辞書よりも多く現れる。英語学習書の英文は一部に文法上の誤りがあるが、いずれも原文通りの引用である。

Able, having strength or power; skilful; sufficient, 能, 可能, 能得, (後略)
 Can, to be able; (中略) 能, 可能, 権能, 能得, 確, 毅.
 Capable, having capacity or ability, 可能, 有能幹.
 Capably, with capability, 可能的, 能幹的.
 Competence, sufficiency; (中略) 够, 敷, 足, 可能, 有権, 権勢, 権柄.
 Feasible, that may be done, 做得, 可能, 可以, 可得.
 Feasibility, the being practicable, 可能, 可得, 可以.
 Feasibly, practicably, 可能, 可以.
 May, (中略) to be possible; to be able; to have license, (中略) 可能, 可以, 有牌照.
 Possibility, the power of being or doing, 可能做的.
 Possible, that may be, 可能.
 Possibly, so that it may be, 如此可能.

(譚宴昌『華英字典彙集』³⁷、1875(光緒1)年)

人人都可能做得来。Any body can do that.
 你可能考究得出呢的野係乜野做嘅呢。Can you find out how this is made?
 禾稈草可能做得紙出。Paper can be made out of straw.
 某某先生可能話得過你知咯。Mr. *** might tell you...
 你可能話我知去邊處買得的唔呢。Can you tell me where can I get some?
 我可能做得好似你咁好。I can do it as well as you.

(譚宴昌『通商指南』、1875(光緒1)年)

36「宴昌」を諱とする判断は林(2001)による。本文では慣例に従って「譚達軒」によって言及した。

37 1897年に出た『華英字典彙集』改訂版の英文の前書きで、依拠した英語辞典について“*It is a Dictionary of the English Language, on the basis of Webster, Worcester, Walker, Johnson, etc.*”云々と説明されているが、それが事実かどうかは疑わしい。当時英国で出版されていた *The Illustrated National Pronouncing Dictionary of the English Language, on the Basis of Webster, Worcester, Walker, Johnson, etc.* 云々という辞書があり、その書名の一部をコピーしているに過ぎないと見られるからである。実際、上記の英文は文法上もおかしく、dictionary や language の語頭が大文字になっているのも英国の辞書の書名を書き写したからであろう。

英国人貿易商アーネスト・メジャー（Ernest Major、安納斯脱・美查）によって創刊され、以後長年にわたって中国で大きな影響力を持ち続けた日刊紙『申報』にも、1872（同治11）年4月30日の創刊の直後から「可能」は現れる。2例を挙げれば次の通りである。

羅船主昏瞽迷乱之中只知自保其身全，不寿画一策懇請一語以救華人，誠無可逃罪。若法船既以船身重大摧壞，即当竭力³⁸赴援以冀幸免魚鱉，何因遲延推諉，卒使群罹滅項之凶，則豈飾弁之可能自解哉。（船客の救助を怠って多数の人命を奪っておきながら、それを弁解したところでどうして責任を免れることができようか。）

（「附録檣尾生来書」『申報』1872（同治11）年5月15日）

倘两国船係伝遞郵報者無論皇家船或皇家租賃船俱照兵船一体相待，又無論船到两国之埠兵船所能領之額外權利者郵船亦可能領。（軍船が受けることのできる特別の権利は郵船もまた受けることができる。）（「附録香港新報」『申報』1872（同治11）年5月21日）

4.9 総括と考察

以上において見てきたように、19世紀中国の出版物において「可能」は広範囲に用いられていた。その出現は特定の書き手の著作に限られるわけでもなければ、キリスト教宣教師の著作に限られるわけでもない。したがって、中国語の「可能」に歴史的な断続があったとする朱（2006）と胡（2014）の見解は少なくとも19世紀初頭以後の期間に関しては事実と反することになる。

調査によって得られた多数の用例の観察を通して、「可能」の用法の傾向も確かめることができる。すなわち、多くの用例における「可能」は能力その他の実現条件の充足を表しているが、中には推測義につながる論理的可能性を表すものもあることが分かる。辞書や語学書における短い例文の中には「可能」の解釈を一意的に特定できないものもあるが、全用例から論理的可能性を表していると確実に言えるものだけを選んで示せば次の通りである（いずれも再掲）。

他従前可能到那处亦未定 *He may have been there formerly; it is uncertain.*

（Robert Morrison 『通用漢言之法』、1815（嘉慶20）年）

PODER v. 能。能穀。可 △ 克（中略）Pode isso ser? 能穀有這樣的麼。豈有此理 △ 可能有此。能如此乎（Joaquim Afonso Gonçalves 『洋漢合字彙』、1831（道光11）年）
Possible, that may be, 可能.

³⁸ 「力」は原文では「立」。

Possibly, so that it may be, 如此可能。（譚宴昌『華英字典彙集』、1875（光緒1）年）

某某先生可能話得過你知略。Mr. *** might tell you...

（譚宴昌『通商指南』、1875（光緒1）年）

20世紀以後の「可能」は19世紀までのそれに単に語の存在の点で連続しているだけではなく、意味上の断続もなかったと考えてよいと見られる。

ただし、筆者の調査では確認できていない問題がある。それは、当時の「可能」という表現の性格、中国語全体における位置付けである。各種資料の観察を通して受けた全体的な印象では、「可」「能」「可以」「能穀」（「能够」）などの類義表現が使用頻度において「可能」を上回る。モリソンやミルンによる聖書の翻訳をギュツラフ（Karl Friedrich August Gützlaff, 1803～1851、郭実臘、郭士立）やブリッジマン（Elijah Coleman Bridgman, 1801～1861、裨治文）が改訳した版では「可能」は消え、「能」などに書き換えられている。このことは、「可能」には方言あるいは文体の点で使用上の制約があり、無条件に使える表現として万人に受け止められてはいなかった可能性を示唆している。³⁹ 筆者は西洋人の著作を中心に調査したが、もし中国人による19世紀あるいはそれに先行する時代の文献に「可能」が多く現れないとすれば、そのような事情が原因であった可能性が考えられる。しかし、これは筆者の調査や考察の及ばない問題であり、後考に待ちたい。

5 日本語における「可能」の成立と普及

前節で確かめたような19世紀中国における「可能」の使用を背景として、同世紀後半の日本において「可能^{かのう}」という新語が成立した。ここではその語史の初期の様相を用例の調査に基づいて確かめる。

³⁹ しかし、少なくとも「可能」が狭い範囲の方言だけで使われていたわけではないと見られる。次のように書名に北京方言、官話方言を謳った辞書にも「可能」の記述は見られる。

可能 can, able to.

(George Carter Stent *A Chinese and English Vocabulary in the Pekinese Dialect*
『漢英合璧相連字彙』、1871（同治10）年）

Capability, 可能, 担得.

Effective, 可能成事.

Feasible or practicable, 可能.

Possible or practicable, 能, 可能, 行得的, 做得的, 可以辦得的, 做得来的; (後略)

(Justus Doolittle *Vocabulary and Hand-Book of the Chinese Language, Romanized in the Mandarin Dialect* 『英華萃林韻府』、1872（同治11）年）

可能 Possibilité

(A.-H. Hamelin *Dictionnaire alphabétique chinois-français de la langue mandarine vulgaire*,
1877（光緒3）年）

5.2 英語辞典などの「可能」

中国の英華辞典に基づく複数の日本の英語辞典に「可能」が現れ、さまざまに訓点を施されていることは先に述べ、数件の事例を示した (3.2)。訓点のないものも含めて類似の例を示せば次の通りである。

Effective, *a.* 効力アル、実効アル、田に立ツ、業リカノリタル、○可能成事、有田、

Possible, *a.* 出来キ、○可能、做得来的、

Virtual, *a.* 働キアル、力アル、勢強キ、○可能、有権、

(吉田賢輔『英和字典』、1872 (明治5) 年)

Can, 能。克。可能。能得^{スヨク} 会^{ルキ}

Effective, 可能成レ事^{ルコトキナ} 有^レ用^リ的^{クナニ}

Feasible, 可能做得成^{ユジス}レ的^{キナニ} 可^レ耕^ル的^{クナニ}

Possible, 可能做得来^{ルキ}レ的^{クナニ} 能得^{ンタ}

((^(マ)鄭其照原著) 永峰秀樹訓訳『華英字典』、1881 (明治14) 年)

吉田の辞書の中国語訳はメドハーストやロブシャイトの英華辞典のそれに一致する。

ロブシャイトの『英華字典』は日本において2種類の形で出版された。その1つは、原著にあった中国語の発音の記載を省き、品詞や主に和語による日本語の語釈を追加した津田仙他^{せん}他^た訳、中村敬^{けい}字^じ (正直) 校正『英華和訳字典』である。この辞書では例文などの取捨が行われ、その結果として「可能」の出現回数は原著より多少少なくなっている。

Abstractive, *a.* 可能除^ク的^{クナニ}, ヌクベキ。

Attainable, *a.* 可得, 可得到⁴¹, 可能得, 可入得, 可中得, 可及, ウベキ, イタルベキ, オヨブベキ。

Capable, *a.* having the requisite capacity or ability, 能, 得, 能幹, 賢能, 有才調, 有才幹, 疆, 疆幹, 疆能, 可能, 可以能, 可以得, 有本事, 有才能, サイノウアル, ヤクニタツベキ, ヤリヤウアル, ワザニタクミナル; capable of holding, as a vessel, 容納得, 可容納, イレコムベキ, 可能装載, ノセコムベキ; (後略)

Competent, *a.* adequate, 足, 優, タリル, ジフブンナル; qualified, having legal capacity or power, 有権, ソウタウノサイアル, ケンイアル; having the necessary ability, 可以, 足以, 可能, 有本事, 才足, 能足, 才堪, タユベキ, ヨクスベキ; (後略)

41 「到」は原文では「倒」。ロブシャイトの辞典でも「倒」になっている (4.6)。

- Comprehensible, *a.* capable of being understood, 曉得, 可能曉, 可通得, サトルベキ, ワカルベキ; (後略)
- Effective, *a.* efficacious, 有成效, 有勢子, 可能成功, 有徵驗, 有勢, 有力, 有用, シルシアル, チカラアル; (後略)
- Enable, *v. t.* to make able, 俾能, 俾得, 使能, 致能, 使可能, 致可能, ヨクセシムル, アタハシムル; (中略) to enable one to do it, 致能為之, 使他可能為之, ヨクコレヲセシムル.
- Equal, *a.* (中略) adequate 足, 可能, 能得, 可以, 做得, タル, ソウオウノ; (後略)
- Feasibility, *n.* 可得者, 可以者, 可能者, ウベキコト, デキルコト; the feasibility of execution, 可以做得, 可以成得, 可能成之, ナシウベキコト.
- Feasible, *a.* 可得, 可以, 可能, 做得, ウベキ, デキベキ; (後略)
- May, *verb. aux.; pret.* might, to be able, 可, 可以, 能, 得, 做得, 可能, 可得, ベシ, ヨク, ウル, ヨクスベシ, ウベシ, アタフ, デキル; (後略)
- Might, *pret.* of may, had power or liberty, 先已⁴²有權, 可以, 先時可得, 先時可能, ベシ, ヨク, ヨクスベシ, ウベシ, アラフ; (後略)
- Possibility, *n.* 可能者, 做得来的, ヨクスベキコト, ナシウベキコト, ナスベキコト.
- Possible, *a.* 做得去, 得, 能, 可能, 可得⁴³, 可有, 或者有, ヨクスベキ, ナシウベキ, アルベキ, ナリタツベキ, アルヒハ, モシクハ, オソラクハ; (後略)
- Potential, *a.* (中略) the potential mode, 可能之式, ヨクスベキコトラ イヒイダス ドウシノハフ (as I may go, or can go).
- Qualification, *n.* natural endowment, 才幹, 才能, 本事, 可能, サイノウ, ハタラク; (後略)
- Qualified, *pp. or a.* fitted by accomplishments &c., 可以做得, 可以能得, 才可以, 才幹可以, 足能, 可能, ナシウベキ, ヨクスベキ, ナシトゲタル; (後略)
- Qualify, *v. t.* to furnish with knowledge, skill, &c., 教到能, 使可能, ヨクスベカラシムル, カナハセル, ヨクタヘサセル; (後略)
- Qualifying, *pp. or a.* 使合, 使可能, 致能, 使可得, ヨクスベカラシムル, ヨクタヘサセル, カナハセル; (後略)
- Sufficiency, *n.* (中略) competence, 能, 可能, ジフブンナルコト; (後略)
- Virtual, *a.* having the power of acting, 可能, 有權, ハタラクチカラアル, ノウアル;

⁴²「已」は原文では「巳」。

⁴³「得」は原文では「能」。すなわち、「可能」が重複して書かれているわけであるが、ロプシャイトの辞典に基づいて訂正した。

（後略）

（津田仙・柳沢信大・大井鎌吉訳、中村敬字校正『英華和訳字典』、1879（明治12）年）

もう1つは井上哲次郎による増訂版である。これは津田らによる『英華和訳字典』と異なり、日本語による語釈の補充はなく、訳語や例文もほぼ4.6に引いた原著の通りであるので、引用は省く。ただし、canの項目の記述に「可能」に関わる調整が施されていることは注意に値する。次にゴシック体で示す訳語は原著にはなく、井上の増補による。

Can, *v. i.*; pret. *could*. To be able, 唵, 会, 能, 得, 克, 可, 可当, 可勝, 能得, **可能**, **能够**; (中略) can it be done? 做得唔呢, **可能否**; (後略)

（羅布存徳原著、井上哲次郎訂増『訂増英華字典』、1883～1884（明治16～17）年）

すなわち、ロプシャイトの原著では例文“Can it be done?”は「可能」を用いて「可能否」と訳されているのであるが、語釈のところには「可能」の訳語が出て来ない。井上はそのことに気付き、「可能」を「能够」とともに追加しているのである。広東語の「唵」の後には広東語と官話に共通する「会」を加えている。⁴⁴

以上のように多数の英語辞典に「可能」という訳語が示されていたことが、カノウと読まれる語としての「可能」の成立の基礎になったものと考えられる。もっとも、それが事実であったとしても、そのように言うだけでは満足な説明にならない。なぜならば、当時の英語辞典に載っていた同類の訳語のうちでその後日本語に語として定着したものはごくわずかしかないからである。例えば、ロプシャイトの『英華字典』のmayの項目には「可以」、possibleの項目には「可有」という訳語が載っているが、そこから「可以」「可有」という語が作り出されることはなかった。英華辞典に由来する訳語のうちどのようなものが日本語に語として定着したかは興味深い問題であるが、それに対する解答を筆者は持ち合わせていない。今言えるのは、「可能」が伝統的な漢文に現れる言い回しであった(5.1)ことは、その語彙化に有利な条件として働いたであろうということだけである。

⁴⁴ ただし、ロプシャイトが不注意によって「会」の訳語を書き漏らしたのかどうかは不明である。ロプシャイトは『英華字典』（1871（同治10）年）において「唵」を“理解する、知る、できる”などと説明しているのに対し、「会」については“集める、合わせる、招集する”などの語釈を優先して示している。『英華字典』で「唵」の訳語を示して「会」を示さない項目があるのは両字の意味の差の認識の反映である可能性もないとは言えない。

なお、調査の限りでは、当時の英華辞典でcanに「会」の訳語を与えているのは鄺其照『字典集成』光緒元年重鐫版（1875（光緒1）年）だけであり、「能够」の訳語を与えているのはJustus Doolittle *Vocabulary and Hand-Book of the Chinese Language*『英華萃林韻府』（1872（同治11）年）だけである。このことは、井上が両書を含む4種類の辞書を訳語の増補に用いたとする宮田（1999）の議論に符合する。

5.3 「可能」の初出——ブリנקリー『語学独案内』

では、「可能」が漢文や英華辞典の文脈を離れて、カノウと読まれる日本語の語として使われるようになったのはいつか。

筆者の調査の限りでは、注目すべきその初出例は、『英華和訳字典』や『訂増英華字典』より数年ないし10年近くも刊行の早い、扉に「英国砲隊士官ブリנקリー氏著」「語学独案内」「明治八年」などと記された英語学習書『語学独案内』^(ひとり)に見出される。フランシス・ブリנקリー (Francis Brinkley, 1841～1912) は1867 (慶応3) 年に日本駐屯軍陸軍士官として来日し、勝海舟らに見出されて海軍省のお雇い外国人になって海軍砲術学校の主任教師 (1871 (明治4) 年) に就任、その後工部大学の数学教師 (1876 (明治9) 年) を経て英文紙 The Japan Mail の経営者兼主筆 (1881 (明治14) 年) となり、英国紙 The Times の日本通信員をも兼ね、終生親的な立場から日本の紹介、擁護に努めた英国人であり、条約改正や日英同盟の締結もブリנקリーに負うところが大きいとされる (亀井他編 (1932)、昭和女子大学近代文学研究室 (1959)、松峰 (1877))。

初編、二編、三編の3分冊より成る『語学独案内』は1875 (明治8) 年⁴⁵に印書局——国

45『語学独案内』の刊行年に関しては検討を要する事情がある。刊行年を1875 (明治8) 年ではなく、1873 (明治6) 年とする記述が多いからである。その第1は著者自身によるもので、『語学独案内』の全面改訂版であるエフ・ブリנקリー著、伊藤博文序、菊池大麓序『新語学独案内』(1909 (明治42) 年、三省堂)の自序において「予ガ旧著語学独案内ハ、明治六年ノ出版ニシテ、爾来三十余年、毫モ取舍セシコトナク」云々と述べられている。後年の他者による記述はすべてそれに依拠しているものと見られる。昭和女子大学近代文学研究室 (1959) は『新語学独案内』の自序を引用して「従って、本書の初版が明治六年の出版であることは確かである」と述べている。しかし、自序の記述ならば無条件に信用できると考えるのはあまりに不用意である。

その一方で、松峰 (1977) の序文の1つである大村喜吉「英語・国語・歴史教師に必見の書」は、「東京神田のS堂にあって調べると『明治8年』が正しいことがわかった」としている。しかし、大村がどのような方法によって原刊年を確かめたかは不明である。「S堂」とは改訂版の『新語学独案内』を出版した三省堂であろうが、その刊行は1909 (明治42) 年であり、明治初年の原刊から時間的に大きく隔たっている。しかも、大村が三省堂で原刊年を確かめたのはそれよりもさらに半世紀も後のことである。そのような条件のもとでの原刊年の信頼に足る確認には限界があったはずである。

『語学独案内』の刊行年を確認するための手がかりは当時の資料に見出すことができる。Griffis (1876) はその刊行直前に書き加えられたと見られる注においてブリנקリーと『語学独案内』に触れ、“The *Go-Gaku Hitori Annai*, three volumes, one thousand pages, or “Guide to Self-instruction in the Language,” by Mr. Brinckley, English officer of artillery, printed by the Insho Kiyoku, 1875, is, I believe, the first original work written in the Japanese language by a foreigner. It is a masterpiece of scholarship.”と賛辞を述べている。そして、それに先立って『語学独案内』を紹介した新聞記事であるGriffis (1875) も、『語学独案内』を“Go gaku Hitori Annai &c (Guide to Self Instruction in the Language, by Mr. Brinkley, English Officer of Artillery. Printed at the Government Press, Tokio, 1875, 3 vols.)”と記し、同書をサトウ、アストン、ヘボンの業績に付け加えられるべきものと評している。『語学独案内』刊行の直後の時期に、同書の内容と価値をおそらく誰よりも正確に理解し刊行を喜んだ人物によって著されたそのような文章において、それも2度にわたって、刊行年の誤認が生じ得たことは考えがたい。さらに言えば、刊行から2年も経ってから新聞にそのような性質の記事が掲載されたとすれば、それもまた奇妙なことである。筆者は、そうした考慮に基づき、『新語学独案内』の自序における記述は単なるブリנקリーの記憶の混乱、さもなくば誤記、誤植の類であり、『語学独案内』の刊行年

立印刷局、財務省印刷局、大蔵省印刷局などの前身——⁴⁶によって出版された英語学習書である。総ページ数は1,000ページを超え、英語学習書と言えば簡素な文法書や会話集しかなかった当時あって比類のない充実した内容を誇り、日本人の英語学習に大きく貢献した。「可能」は、同書三編における potential mood の説明の文脈においてその訳語「可能法」の構成要素として現れる。

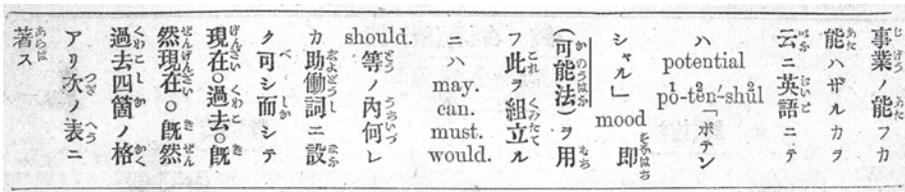


図2 ブリנקリー『語学独案内』

事業ノ能フカ能ハザルカヲ云ニ英語ニテハ potential mood 即「可能法」ヲ用フ。此ヲ組立ルニハ may, can, must, would, should 等ノ内何レカ助動詞ニ設ク可シ。而シテ現在、過去、既然現在、既然過去四箇ノ格アリ。(中略) 可能法既然現在ノ助動詞トシテ may ヲ設クルトキハ物ノ無キニシモ非ル義ニ適当リ。比例「何何ガ有タカモ知ヌ」等ノ如ク。又 must ヲ設クルトキハ物ノ有シコトヲ推察シテ云義ニ適当リ。比例「爰ハ雨ガ降ツタンダロフ、壤地ガ湿テ居所ヲ見レバ」等ノ如ク。又ハ cannot ヲ設クルトキハ右 must ノ打消ノ如ク物ノ非リシコトヲ推察シテ云義ニ適当リ。比例「爰ハ雨ガ降ナカツタンダロフ、壤地ノ乾テ居所ヲ見レバ」等ノ如シ。

(ブリנקリー氏著『語学独案内』三編、1875 (明治8) 年)

potential mood (ないし potential mode) は、現代に言う法助動詞を伴う動詞の用法を指す用語である。must や should の助動詞も挙げられている通り、potential mood には必然や義務などを表す表現も属し、日本語文法で可能表現とされるものの範囲には一致しない。当時日本の英語教育に大きな影響力を持っていたピネオやカッケンボスの文法書は、potential

は 1875 (明治8) 年であったと推定する。

⁴⁶『語学独案内』には出版者をめぐっても不明確な事情がある。目下の文脈では特に意味を持たないが、その概略を述べれば以下の通りである。調査によって確認できた限りでは、『語学独案内』の 1875 (明治8) 年における出版者は初編については印書局、二編と三編については読売新聞の前身である日就社である。しかし、直前の注に引用した Griffis による 2 件の記述は 3 冊とも印書局から出版されたという書きぶりである。『語学独案内』は刊行後複数の出版社によって複製本が出された。元來 3 冊とも印書局による刊行であったのか、二編と三編は当初から日就社による刊行であったのか、確定的な判断を下せるだけの証拠がない。同書の残存状況からすれば後者の可能性が高いようにも思われるが、今確実に言えるのは、印書局の刊行による二編と三編の存在は知られていないということだけである。

mood の表す意味を “power, possibility, liberty, obligation, duty, necessity, inclination, determination” (Pinneo (1854))、 “permission, possibility, ability, necessity, determination, or obligation” (Quackenbos (1866)) と説明している。

『語学独案内』の「可能法」に関しては、検討を要する問題が3つある。

その第1は、「可能法」という訳語が何を根拠として作り出されたのかということである。まず、「法」について言えば、これは単に蘭学以来の伝統を踏襲したものである。例えば藤林普山^{ふざん}訳述『和蘭語法解』巻之中(1812(文化9)年)には「活言法」の1つとして「許可法」が「直説法」「使令法」などとともに挙げられている。英文法においては、potential mood は『語学独案内』以前は——また、それ以後もしばしば——「許可法」「可成法」「成就法」のいずれかによって訳されるのが通例であった。⁴⁷

potential を「可能」と訳して「可能法」という用語にしたことについては、その根拠となっている可能性のある先行資料が1つある。それはほかならぬロプシャイトの『英華字典』で、potential の項目の末尾に “the potential mode 可能之式” という記載がある(再掲)。

Potential, 有権嘅, 吟能嘅, 能 : existing in possibility, not in act, 可, 得, 可有, 可為 ;
the potential mode 可能之式.

(Wilhelm Lobscheid 『英華字典』 Part 3, 1868 (同治7)年)

プリンクリーは来日前の約3年間従兄の香港総督の副官として香港に滞在しており、そこでロプシャイトの英華辞典を入手し日本に携行した可能性は十分にある。また、いずれにせよ同辞典はおそらく当時すでに日本に舶来されていたことであろう。以上の事実と推定に基づいて第1の問題に対して解釈を与えるならば、「可能法」は蘭学以来文法用語として定着していた「～法」という表現に、ロプシャイトの「可能之式」に含まれる「可能」をカノウと読んで組み合わせた結果であることになる。⁴⁸

第2の問題は、「可能法」という用語の考案者である。かりにプリンクリーが香港から携行した英華辞典が利用されたとしても、必ずしもプリンクリー自身によって造語が行われたということにはならない。と言うのは、『語学独案内』の日本語は文体的に多様でありながら全体にきわめて自然で、執筆に際して日本人の相当の関与があったことが明白だからである。「ナンダ馬鹿^{いひ}云ナセエ。一両出^{だせ}バ鉄道^{てつどう}ヲ横浜ノ往返ガ出来ヨフジヤアネイカ。ソナナ相場^{ばち}ガアルモノカ。初^{はじめ}テ人力車^{のり}ニ乗^{のり}ハシマイシ、己^{おれ}ダツテ無理^{だん}ナ談^{だん}ジハシナイ。一分^{よか}二朱^{よか}デ能

⁴⁷ 改訂版の『新語学独案内』では「可能法」が「許可法」に変更されているほどである。

⁴⁸ 念のため付言すれば、ロプシャイトの辞典と『語学独案内』では文法用語の不一致が多く、後者が前者に大きく依存しているわけではない。

ロフ。」のような口頭表現の技能は語学の才に長けたプリンクラーが実際に体得していたことも考えられるが、「兵器ヲ作ルハ均ク是業ナリ。豈仁不仁アランヤ。然ト雖モ函人ハ唯人ヲ破ルヲ懼レ、矢人ハ唯人ヲ破ザルヲ懼ル。故ニ仁不仁アルナリ。」⁴⁹のような訳文や上に引用したような文法の解説を書いたのは確実に日本人であろう。『新語学独案内』の自序には「旧語学独案内ハ、故浜田宜弘氏ノ助力ニ頼」ったと述べられている。「可能法」の造語者はその浜田なる人物であったか、さもなくば、ほかにも日本人協力者があったのであろう。

『語学独案内』の「可能法」をめぐる第3の、そして、最も重要な問題は、「可能」の語史におけるその訳語の位置付けである。「可能法」の造語者にはカノウと読まれる「可能」の語を創造した功績が認められ、また、その後の日本語における「可能」の使用はこの「可能法」から始まったのだろうか。

私見によれば、そのような見方には無理がある。一般論として、我々は調査によって得られた初出例を直ちに語史の起点と見なす短絡に走ってはならない。筆者の推定する真相はむしろ、当時の日本の知識層において「可能」はヨクスベシ、アタフベシ、デクベシなどと読まれ（3.2）⁵⁰、加えてそれをカノウと直読する慣習も形成されつつあった、そして、『語学独案内』の「可能法」は——また、『哲学字彙』に挙げられた「可能」も——その慣習の発現だったというものである。この見方によれば、『語学独案内』における「可能法」の造語者も『哲学字彙』の作成者も「可能」の造語者ではない。⁵¹「可能」は、今や知ることのできない特定の個人、あるいはむしろ、特に誰ということはなく不特定多数の日本人によってカノウと読まれるようになり、それが普及していったものと思われる。

また、「可能法」という文法用語がその後の「可能」という2字語の出発点になったわけでもない。「可能法」が「可能」に先んじて存在したという考えは、新語の発生の順序としても不自然である。「可能法」はすでに音声言語ではそれなりに普及していた「可能」^{かのう}を使って作られたと考えるのが穏当であろう。

5.4 初期の用例

『語学独案内』における先駆的な初出から10年間近くは「可能」の普及の兆しが見られない。筆者の確認できた第2の出現は、惣郷・飛田編（1986）にも挙げられている井上哲次郎ほ

49 これは“兵器の製造はすべて同じことで、そこに人道性の有無の別などないと思われるかも知れない。しかし、鎧の製造者はおっぱら人の殺害を恐れ、矢の製造者は人の無事を恐れるから、人道性の有無の別は現にある。”という趣旨の英文の訳である。

50 『語学独案内』は語彙の解説欄において possible を「能ベキ」と訳している。

51 陳（2011）が、従来漢語の出自の誤認を生じてきた原因の1つとして「名人造語説の流布」を挙げている。すなわち、新語の用例が福沢諭吉、西周、井上哲次郎といった著名な知識人の比較的早い著述中に見つかればそれで造語者が分かったと即断し、また、他者のそうした見解を軽信することによって誤った説が定説化していく傾向である。

かによる『哲学字彙』におけるものである。『哲学字彙』の刊行は『語学独案内』の刊行の6年後である。

Possibility 可能

Virtual 可能

(東京大学三学部印行『哲学字彙』、1881(明治14)年)

記述の体裁上こそ英華辞典のそれと変わりが無いが、『哲学字彙』は学術用語の日本語訳を提示するものであるから、ここでの「可能」の読みは確実にカノウである。項目2件のうち virtual の「可能」という訳語はロブシャイト『英華字典』の記述をそのまま利用したものと見られる。「可能」はその後むしろ possible の定訳として使われるようになるが、『哲学字彙』には possible の項目はない。そして、possibility の「可能性」はこの『哲学字彙』における記載が初出例となる。ロブシャイトの辞典における possibility の中国語訳は「可能者、做得来的」であった。⁵²

『哲学字彙』の記述はその後の日中両語における「可能」「可能性」の普及に直接ないし間接的に決定的な役割を果たしたものと思われる。『哲学字彙』刊行後数年のうちに英独仏の辞書に「可能性」が採用されている。

Possibility, *n.* 可能性。可成性

(柴田昌吉・子安峻編『増補訂正英和字彙』第二版、1882(明治15)年)

Möglichkeit, *f. -en* 可能性

(金子直行纂訳『訂訳増補独和辞書』、1885(明治18)年)

Möglichkeit, *f. pl. -en*, 能フベキコト, 可能性

(風祭甚三郎『増訂独和字彙』第三版、1887(明治20)年)

Possibilité, *s.f.* 可能性。或有。

(^{やすゆき}野村泰亨纂訳、^{とくすけ}中江篤介(兆民)校閲『仏和辞林』、1887(明治20)年)

⁵²『哲学字彙』の「可能性」を単にロブシャイトの「可能者」の「者」を「性」で置き換えただけのものと理解してよいかどうかは明らかではない。沈(1994)によれば、ロブシャイトは英語式の形態的標識の付加による品詞の表示を中国語で試みているが、「外来概念を受け入れるに際して『英華字典』はまだ[句から語へ]の前段階にとどまっていた」。この指摘に基づいて考えれば、ロブシャイトの「可能者」はおそらく少なくとも現代人の考える「可能性」とは異なり、単に“可能であること”のような意味を表していたと見られる。ロブシャイトは possibility については英語による語釈を示していないので「可能者」の意味を直接知ることができないが、例えば completion については“act of completing”と説明したうえで「完者、成就者、成完者」という訳語を示し、evaporation については“the conversion of a fluid into vapor”と説明して「蒸成気者、蒸化気者、散気者」と訳している。

もっとも、『哲学字彙』の「可能性」にどのような意味が込められていたかもまたはっきりしない。ことによっては、それはロブシャイトの「可能者」と大差はなく、その後意味的な発展を遂げたということであったかも知れない。しかし、「可能性」の1語だけを見てその真相を知ることはできない。確かな理解を得るには、多数の語の観察に基づく接尾辞「性」の発展過程の解明が必要である。

『語学独案内』における「可能法」の出現に次いで、辞書類を除く普通の文章中に「可能」の使用を再び見出せるのは、『語学独案内』の刊行から9年後の1884（明治17）年のことである。現在ではあまり使われない「可能的」という形での使用である。

与債約ノ貸付契約ト異ナルハ其現在実決ノモノニ非スシテ唯タ可能的随意的ニシテ且併セテ未来ノ与債ニ其効力アル所ニ存ス。

（ロエスレル氏起稿『商法草案』第三、1884（明治17）年）

ヘルマン・レースラー（Hermann Roesler、1834～1894）はお雇い外国人として大日本帝国憲法や商法草案の作成に携わったドイツ人法学者、経済学者である（篠田編（1956））。例中の「可能的」はドイツ語の原文（Hermann Roesler *Entwurf eines Handels-Gesetzbuches für Japan mit Commentar*, Zweiter Band, 1884）における möglich を訳したものである。“与債約”が“可能的、随意的”であるとして、“現在実決”である“貸付契約”と対比されている。翻訳者は不明である。

この『商法草案』以後はほぼ毎年「可能」の用例が見出されるようになる。明治20（1887）年前後が「可能」の普及の開始時期と言える。

数多ノ学士ハ皆此理由ニ基キテカハ物ノ性質ナリ機能ナリトセリ。今細ニ之ヲ言ヘハ、力ハ即チ物質分子作用ノ状態ナリ或ハ其運動ナリ或ハ運動ノ性能ナリ。尚一層詳ニ言フトキハ可能的若クハ真实的ノ運動ノ原因ニ命シタル名目ナリ。然レトモ要スルニ其何レニマレ事実ニ異同アルコトナシ。

（中川重麗抄訳「唯物論一斑」『東洋学芸雑誌』第48号、1885（明治18）年）
酒或煙草ニ耽ル人ハ教師ノ職務ニ従事セントスルノ念ヲ抱クベカラザルコト勿論ナリ。飲酒喫煙ノ实例ハ其害甚強大ニシテ德行ニ関シテ教師ノ教訓シタル事ハ一切是ガ為メニ無効ニ属スベシ。概シテ考フルニ全体ノ権衡ヲ乱リ人生ノ可能力ヲ減少スルニ大ナル勢力ヲ有スル悪習ヲ以テ学校教育ノ智識ニ伴フガ如キコトアランヨリハ、寧ロ無学ニシテ通常学校ニ於テ授クル所ノ学科ヲ知ラザルコトヲ以テ愈^{（まぎ）}レリスベキガ如シ。

（ジョホノット著、高嶺秀夫訳『教育新論』卷之三、1886（明治19）年）
教育ノ天性ハ精神若クハ精靈ノ天性ニ依テ決定シ、精靈ノ活動ハ常ニ静勢的 Potentially ニ有スル所ヲ自己ニ実有センコトヲ務ム。其可能性ヲ意識シ、意志ヲ以テ之ヲ制御センコトヲ勉ム。精神ハ静勢的ニ自由ナリ。教育ハ人ノ可能性ヲ開発センコトヲ求ムルノ方便ナリ。故ニ教育ハ其目的トスル所自由ナリ。

（ロセンクランズ著、朝夷六郎訳「教育哲学」『教育時論』第83号、1887（明治20）年）

設シ最初ヨリ成就ノ可能ナル条件カ後ニ至リテ不可能ト為リタルトキハ是レ可能ナル条件消滅シタルモノナリ。又權⁵³利行為ノ作成ノ当時ハ其成就不可能ナリシモ後ニ至リテ可能トナリタルトキハ未定ナル条件存在スルニ外ナラス。

(沢井要一訳『独逸民法草案理由書』、1888(明治21)年)
 オルフ⁵⁴哲学ノ材料、及び其ノ科学的分類法ヲ単簡ニ叙セントスレバ、先ツオルフ自家ノ哲学ノ定義ヨリ初メザル可ラズ。蓋シオルフノ定義タルヤ、哲学ハ可能^{ボツシイブル}ノ科学ナリト云フニアリ。而シテオルフノ所謂可能トハ、何事モ反対スルコトナクシテ以テ包括シ去ルトノ事ナリ。

(藤村居士纂訳「近世哲学史綱」『教育時論』第143号、1889(明治22)年)

当初もっぱら学術的、専門的な文章に使われていた「可能」が新聞記事に初めて現れるのは調査の限りではさらに10年以上後の1900(明治33)年のことである。新聞記事における「可能」は当初すべて「不可能(的)」という否定の形で現れる。

英国外務次官ブロードリック氏が下院に演説したる所に拠れば「聯合軍の司令官等は其の率^(ママ)ゆる所の軍隊にて北京に向つて前進する一事は数に於て全く不可能的に属すとの意見を取れり」といふ。是れ英国政府が日本の出兵を希望するの原因なる可きが、今回我国より一師団の全数を挙げて北清に派遣する事となりても之れを聯合軍に合算して北京突進の作成計画に猶不足を感ずるは別項記する所の如し。

(「前進は不可能的」『東京朝日新聞』、1900(明治33)年7月9日)
 ベルリンに於て半官報を以て指目せらるゝ、ポスト新聞は曰く、真に英仏を一致せしむるは不可能なり、両国の間再び紛争を見るは必然なり、然れども独逸は平和の新保証たる両国の一致に対しては好意の傍観者たるべしと。

(「英仏の接近と独逸」『東京朝日新聞』、1903(明治36)年5月6日)

5.5 総括と考察

漢文に現れる「可能」は英華辞典の possible ほかの項目における訳語としても近代の日本人の目にしばしば触れ、それをカノウと直読する慣習が形成された。「可能」を確認できる最初の資料は1875(明治8)年に出版されたブリנקリー『語学独案内』である。その後『哲学字彙』を始めとする辞書類に「可能」は「可能性」とともに掲載され、明治20(1887)年前後から各種の学術的、専門的な文脈において使用が徐々に増加し、その後新聞記事にも

53 「權」は原文では「條」。

54 ドイツの哲学者クリスティアン・ヴォルフ (Christian Wolff, 1679～1754)。

使われるようになった。調査によって見出すことのできた明治期の用例を年表の形にまとめれば次頁の表1のようになる。筆者が先に考察した「科学」に比べると（拙論（2016））、「可能」は使用の開始も普及も遅い。

「可能」と「可能性」の意味・用法が時間の経過の中でどのように展開したかは興味深い重要な問題である。しかし、語史の初期の段階における用例が少ないうえに、使用の文脈が多様な専門にまたがり、また、個々の用例の意味を考える際にはそれが何の訳語として使われているかを見極める必要もあり——英語に限っても、原語が必ずしも possible、possibility であるとは限らない——、ここでは分析が及ばなかった。

いずれにせよ、私見によれば、「可能」と「可能性」の意味変化の記述は複雑で見通しの悪いものになることを避けられない。なぜならば、いずれも複数の原語の翻訳であるうえに、例えば possible や possibility がそうであるように原語自体が多義的である。実際、用例の浅い観察からも「可能」「可能性」は当初より多義的であったと見られ、したがって、単一の意味を起点とする派生として単純に図式化できるような理解は求めても得られないものと思われる。もっとも、「可能」「可能性」の語史の満足な理解のためには、複雑な記述になろうともその意味・用法の変化の解明が必要であることは言うまでもない。⁵⁵

6 中国語における「可能」の展開

19世紀の中国において、「可能」は広く使われていた。そして、観察される用例の多くは実現条件の充足を表しているが、中には論理的可能性を表すものもあった（4.9）。

その「可能」は20世紀に入って急速な活性化と変貌を遂げた。すなわち、使用頻度が高まるとともに、用法上の顕著な変化が生じた。それは紛れもなく日本語の影響によるものであった。しかし、現代中国語の「可能」が日本語からの借用語だ（胡（2014））ということ

⁵⁵ possible や possibility の訳語形成という観点からすれば、「可能（性）」が定訳化するまでに試みられた異訳の状況も確認する必要がある。これについては、多数の異訳を有した「科学」と異なり、「可能（性）」にはほかに「可成（性）」という訳語があった程度である。先に掲げた『附音挿図英和字彙』は possibility に「可成^{アズツヘキ}コト」、『三語便覧』は possible に「可成^{アズツヘキ}」という訳語を与えていた（3.2）が、「可成」はそれらに基づく直読語である。

「可成（性）」には次のような用例がある。ただし、数は少ない。

余か「哲学概論」は載せて本年講義録にあり。読者此論に入るに先ち、彼の知識論の一章を閲するあらは、又大に解し易きものあらん。殊に本篇に於ては認識論の意義、可成^{アズツヘキ}及ひ之に對する古來の異説等は、彼と重複するの嫌ひあるを以て一切之を割除せり。

（松本文三郎『哲学館第十一学年度高等宗教学科講義録 認識論提要』、1899（明治32）年）
夫レ普通的精神能力ナルモノアリテ、幾分カ外部ノ材料ニ依テ発達増強シ、其單純的可成性ノ態度ヨリ能力ニ陸進シ得ルカ如キハ、既ニ（第八節ニ於テ）陳述シタルカ如ク、内部的經驗ノ毫モ認識セサル所ナリ。

（ヘルマン・ケルン原著、国府寺新作講訳『新版増補ケルン教育学』、1893（明治26）年）

表1 明治期日本「可能」年表

年	資料名	出現形・文脈	分野
1875(明治8)	プリンクリ 語学独案内	可能法(potential mood)【「可能」初出】	英文法
1881(明治14)	東京大学三学部 哲学字彙	可能(virtual), 可能性(possibility)【「可能性」初出】	
1882(明治15)	柴田昌吉・子安峯 増補訂正英和字彙 2版	可能性(possibility)[, 可成性]	
1884(明治17)	ロエスレル 商法草案3	可能的【「可能的」初出】	法学
1885(明治18)	金子直行纂訳 訂訳増補独和辞書 東洋学芸雑誌48	可能性(Möglichkeit) 可能(運動), 可能的(ノ運動)	物理
1886(明治19)	ジョホノット著 高嶺秀夫訳 教育新論3 高橋五郎 英米語学独案内	可能的(ノ觀念), 可能性, 可能力 可能法(potential mood)	教育 英文法
1887(明治20)	風祭甚三郎 増訂独和字彙 3版 野村泰亨纂訳 中江篤介校閲 仏和辞林 教育時論83	可能性(Möglichkeit) 可能性(possibilité) (人ノ)可能性(ヲ開發センコト)	教育
1888(明治21)	沢井要一訳 独逸民法草案理由書	可能, 不可能【「不可能」初出】	法学
1889(明治22)	三宅雪嶺 哲学涓滴 今村研介訳 独逸民法草案2 教育時論143,144,146	可能, 不可能, 可能性 不可能 可能(ノ科学), 可能性	哲学 法学 哲学
1892(明治25)	ケルン著 沢柳政太郎他訳 格氏普通教育学	(教育ノ)可能	教育
1893(明治26)	松尾貞次郎 教育哲学史 ケルン著 国府寺新作訳 新版増補ケルン教育学 民友社 現時之社会主義 ダーサ著 大原嘉吉訳 瑞派仏教学 早稲田文学51	(国民全体ノ, 人類一切ノ)可能性 可能力[, 可成性] 不可能的 可能的, 不可能的 可能的	教育 教育 社会 宗教 芸術
1894(明治27)	湯本武比古 新編教育学 ポーリユ一 今世国家論 ウールキンス 新撰夷論	(教育ノ)可能[, 能フ可キ, 能フ可ラズ] 不可能的 不可能的	教育 政治 政治
1895(明治28)	ヘフディング著 石田新太郎訳 心理学上1	不可能的	心理
1898(明治31)	高木貞治 新撰代数学	(分解)可能[, 分解不能]	数学
1899(明治32)	下田次郎 教育原論 田中敬一・石田新太郎 普通教育学 宮田修 通俗言語学 星野久成 新式英語学独修	(教育の)可能, 不可能 可能[, 能フベシ] 可能(の助動詞) 可能法	教育 教育 英文法 英文法
1900(明治33)	東京朝日新聞7/9	(前進は)不可能的(に属す)	軍事
1901(明治34)	松下大三郎 日本俗語文典 草野清民 日本文法 東京朝日新聞5/2	可能 可能 不可能	日本文法 日本文法 経済
1902(明治35)	東京朝日新聞1/30	不可能	産業
1903(明治36)	東京朝日新聞5/6,7/18,8/1	不可能	国際他
1904(明治37)	東京朝日新聞6/10	不可能	軍事
1905(明治38)	左右田喜一郎 信用券貨幣論 クニルリグ著 佐々木吉三郎解説 算術教授法真髓 徳谷豊之助・松尾勇四郎 普通術語辞彙 東京朝日新聞6/29,7/16	可能, 不可能, 可能性 可能(なり, である, を生ず), 可能的, 不可能 可能的, 可能性(possibility, Möglichkeit) 可能, 可能的	経済 数学 論理 軍事他
1906(明治39)	佐々木吉三郎 修身教授法集成 佐藤広吉 平和之福音 鈴木暢幸 日本語文典 中島力造編 泰西新著梗概2上 東京朝日新聞3/2,10/2	(道徳的)可能性 (贖罪(あがなひ)の)可能性 可能, 不可能 可能, 不可能 不可能	修身 宗教 日本文法 生物他 軍事他
1907(明治40)	福井久蔵 日本文法史 東京朝日新聞3/9,7/17,10/2	可能(の助動詞) 不可能	日本文法 軍事他
1908(明治41)	星野光多 耶蘇之三大観	(人間の)可能性[, 開展性]	宗教
1909(明治42)	建部遷吾 社会静学 中島力造 グリーン氏倫理学説 玉利喜造 実用倫理 遠藤隆吉 東洋倫理	(教化の)可能性 可能性 (教育の)可能性, 不可能性 (善の)可能性(を有する)	社会 倫理 倫理 倫理
1910(明治43)	佐佐木惣一 日本行政法原論 武本喜代蔵 基督教哲学一斑 [中外日報 5/27~,11/25~ 東京朝日新聞11/8,10~11	意欲可能(rechtliche Wollenkönnen) (宗教的)可能, (宗教的)可能性 (センチ)メンタル・ボンビリチー 可能性[, ボシビリチー]	政治 宗教 心理 心理
1911(明治44)	海野幸徳 興国策としての入種改造	可能, 不可能	社会

ではない。中国語に古来あった「可能」が日本語の影響によって類用化し、性質を変えたということである。

中国語の「可能」が19世紀末ないし20世紀初頭以後に有するに至った諸特徴は、日本語の影響によるものと、中国語内部で生じたものとに分けて考えることができ、また、現代中国語の「可能」の形成を理解するにはそうすることが必要である。

6.1 日本語の影響による変化

現代中国語の「可能」には、過去の中国語のそれにはなかった特徴がいくつもある。

まず、過去の中国語で「可能」が名詞の修飾に使われることが皆無であったかどうかは確認を要するが、少なくとも筆者の調査の範囲にその例はなく、「可能的 {方法／範囲／原因／解釈}」のような表現における「可能的」の用法は日本語の「可能(的)な(る)」などの言い回しの影響によるものであろう。また、「可能方法」のように「可能」を名詞に前接させる言い回しは今日の日本語では普通使われないが——「可能世界」のような専門用語はある——、過去の日本語にはそれがあった。

概念に於て世界をかく単純化することは、實際人間意識の如き制限せられたる意識が自己の表象世界を支配し得る唯一の可能方法である。

(宮本和吉『哲学概論』、1916(大正5)年)

検差法は大量の分解と、分類されたる諸部分の比較的考察より成る。(中略) 仮令ば職業別死亡の研究にありては、諸職業に従事せる人々の年齢をも亦問ふの要あるが如きなり。凡てその手続は實際原因の究明よりも、寧ろ可能原因の究明に尽す⁵⁶とも謂ひ得べき所なり。

(財部静治「統計による因果関係の研究」『経済論叢』第22巻第3号、1926(大正15)年)

次に、現代中国語では「可能」に「很」「非常」などの程度修飾表現が加えられることがある。これも、今日の日本語では類似の言い回しは少なくとも一般的ではないが、過去の日本語では「可能(である)」に「非常に」「極めて」などが添えられることがあった。

又西伯利^(シベリア)に於ても純原料品の輸出を半製品の輸出に変更すべき進化が極めて可能なるが如し。

(井染祿朗『西伯利経済地理』、1918(大正7)年)

日本では現在労働組合が先づ発達してゐない為^(ママ)めに、工場としては賃金を減らすといふ

⁵⁶ 「す」は原文では「ず」。誤植と見て訂正した。

方法で、一部失業を行つて全部失業といふものを防ぐことが事実上、非常に可能である
 為^(ママ)に、トータル・アンエムプロイメントが少ないだけの話で、(後略)

(「失業問題討論会」『改造』1930(昭和5)年7月号)

したがって、「很可能」「非常可能」のような言い回しも日本語の表現法になつたものと見られる。ちなみに、現代の日本語でも「十分可能である」のような言い方は広く用いられているので、日本語では「可能」の程度修飾をしなくなったということではなく、組み合わせ得る修飾表現の範囲が狭まったということであろう。

また、現代中国語の「可能」には「可能性」と同義の名詞としての用法がある。これも今日の日本語にはないので現代人の目には日本語との関連が見えないが、過去の日本語には現に「可能」の名詞用法があつた。次のような例における「可能」は今の日本語ならば「可能性」と表現されるであろう。

かゝる事情よりして、算術上、重大なる意義と運用範囲とを有する可能を生ず。即ち、数が連続の諸部として用ひらるゝ限りは、任意に之を変じ得ることこれなり。

(R・クニルリング著、佐々木吉三郎解説『算術教授法真髓』、1905(明治38)年) 人間協力が現存するところ、またその可能が現存するところ、そこには政治が必要だ。(中略) 国家が、その人口に於いて、その領土に於いて、またそれらによつて決定される諸種の關係に於いて、或る程度以下に小さければ、或ひは立法、行政の代理者を要せず、或ひはそれらを要するとしても、代理者と被代理者との間の關係が完全に保有され、創造される可能がある。

(杉森孝次郎「政治の本質価を考究して現代国家不安の将来を論定す」

『中央公論』第37年第11号、1922(大正11)年)

中国語における「可能」の名詞用法もこうした日本語の言い回しの影響と見られる。

接尾辞「性」を伴う複合語「可能性」は確実に日本語からの借用語であろう。早い時期の用例を示せば次の通りである。

若無外部之環象則天賦之性能亦僅為可能性而不得日見其發達矣。(教育などの) 外的な現象がなければ天賦の才能もまた可能性に過ぎず、日々その發達を見ることができない。)

(「論近日教育上急宜改良之要点」『申報』1909(宣統1)年8月20日)

自科学發明以來，食料增加的方法愈出愈多，或者不止數學的級數。但食料增加的可能性，雖毫無疑義，然就「時間」和「空間」論事，就不能過於樂觀了。(食料増産の可能性にはい

ささかの疑いもないが、時間と空間の観点から事を論じれば、あまり楽観することもできない。）

（「学術講演会講演経済学紀」『申報』1920（民国9）年4月4日）

原理上は中国語の中で「可能」に「性」が加えられたという解釈もあり得るが、沈（1994）によれば、1920年代後半に至っても「性」は「まだ生産的に訳語を構成するパラダイムにおいてしかるべき位置を占めていなかった」。第2の例において「時間」と「空間」に引用符が添えられているのもおそらく、両語が日本語から借用された新語で、まだ中国語に定着していなかったことの反映であろう。

最後に、「不可能」は調査の限り19世紀初頭から終盤にかけての資料中にはまったく現れず、「可能」の否定の意味を表すには「不能」や「不可」などの言い回しが用いられていた。現代中国語における「不可能」の普及も日本語の影響によるものであろう。ただし、「不可能」という言い回し自体は古くから中国語にあり（5.1）、「不」と「可能」を組み合わせることは中国語の一般的な文法操作であるので、「不可能」が日本語からの借用語だと単純に言えるわけではない。実際のところは、文法上規則的に作り出せる「不可能」という句が、日本語の1語化した「不可能」の流入の影響によって頻用化したといったことではないかと思われる。

なお、以上の項目の一部について見たように中国語に影響を与えた日本語の用法がその後時間の経過の中で日本語から失われていることがあるという事実は、日中両語間の語彙交流を考える際には両言語の過去の状態を比較しなければならないという、当然と言えば当然の教訓を意味する。

また、新聞記事に現れる新語——当時の中国で言う“新名詞”——を解説した Ada Haven Mateer *New Terms for New Ideas: A Study of the Chinese Newspaper* は、1922年に出版された改訂版に付載された増補語リストにおいて、“XXXI. Positive, Negative, and Other Adjectives”の見出しのもとに「可能 Possible」「不可能 Impossible」の2語を「絶大 Greatest」「多大 Huge, enormous」「一般 All, universal」「流行 Prevalent」「真正 Real, genuine」「円滑 Easy」「有効 Efficient, in force」「無限制 Unqualified, unlimited」「最後（終） Final」「実力 Real, unequivocal, really」とともに挙げている。1917年に出た改訂版にそれらの増補語は載っていないので、著者は1920年前後に「可能」と「不可能」の普及を認識したのであろう。該書で「可能」と「不可能」が新語として扱われているわけであるが、それを字義通りに受け止めて、1920年以前の中国語にはそれらの語がなかったと即断してはならない。著者は前書きにおいて新語の定義が困難であることを述べ、“近年新聞や講演でよく使われるようになった語”を広く新語として扱うと説明している。

6.2 内発的な変化

現代中国語の「可能」には、日本語とは直接に関わらず、中国語内部で生じたと考えられる特徴もある。

まず、容易に確認できる形式上の事実として、動詞句との組み合わせにおける「可能」の文法的挙動の自由度が増した。過去の中国語では「可能」はもっぱら動詞句の直前に置かれていたが、現代語では「可能大家還記得這件事。(皆まだこのことを覚えているだろう。)」(呂編(1980))のように主語の前に置かれたり、「人類可能因自己的行為加速地球的毀滅。(人類は自らの行為によって地球の破壊を加速しているかも知れない。)」(ウェブ上のニュース記事の標題)のように「可能」と動詞のあいだに主語以外の表現が介在し得るようになった。また、「朱文紅可能會反駁你的意見。(朱文紅はあなたの意見に反論するかも知れない。)」(鄭雨秋明天可能可以來上班。(鄭雨秋はあす出勤して来ることができるかも知れない。))(戴(2003))のように「可能」に別の助動詞類が後続したりすることも可能になった。もっとも、このような文法的自由度の増加は「可能」だけではなく、ほかの助動詞類——「可以」「應該」など——にも共通する現象である。

そして、おそらくそうした文法的変容とも連動して、「可能」に話者の推測を表す用法が生じた。「可能」は元来多義的であるが、“～することもある、～でないとは限らない”のような論理的可能性を表す用法から、“たぶん～、もしかしたら～”と話者の推測を述べる用法が派生したものと筆者は推定する。前者は曹(2008)が「可能性叙述」と呼ぶ用法、後者は曹が「可能性判断」「推し量り」と呼ぶ2用法に対応する。

文法的自由度の増加も、話者の推測を表す用法の派生も、日本語にはそれらを誘発する要素がない。したがって、それらは中国語における内発的な変化だと考えられる。

論理的可能性の叙述と話者の推測の表明は概念上は明確に区別することができるが、両者を中国語の「可能」の異なる2義として数えるべきなのか、両者は境界の不明な1つの意味であるのかは明らかではない。多くの記述は両者をまとめて1つの用法として扱うが、劉他(1983, 2001)では2つの用法と見なされている。もっとも、劉他は“助動詞の用法以外に推測を表す副詞の用法がある”と述べているだけで、両者の区別の内実に関する議論はない。朱(2006)と胡(2014)も推測義を独立のものと考えていると言えるが、やはり感覚的な判断に依存しており、根拠は示されていない。「可能」の文法的観点からの考察にも裏付けられた、言語学的な検証に耐える議論の出現を期待したい。⁵⁷

57 ほかに、中国語の「可能」に関する研究では、それが1語化した、1語化していないということも軽く言われるが、1語化したかどうかの判定の根拠が示されず、同じく感覚的な表現にとどまっている。「可能」を助動詞と見るのか副詞と見るのかという問題もある。「可能」の文法・意味両面からの総合的な考察が求められる。

なお、話者の推測を表す用法に関して付言すれば、19世紀末の資料に次のような用例があった。もしここにおける「可能」が書き手の推測を表しているとするれば、筆者の確認の限りではこれが最も早いその種の用例であることになる。

奉化県境民人向不講求蚕桑之利，近日蕭王廟、周村、長汀等処始広栽桑樹間間十畝，一望成林。所出之繭較前倍增，糸亦光彩煥発，不亜余姚、海寧諸郡邑所産。現在時過穀雨，転瞬浴川、猷繭，当有可能繰車軋軋之声矣。（すでに穀雨を過ぎて養蚕の時期となり、今ごろは糸を繰る器械の音がしているだろう。）（「甬江桃汛」『申報』1899（光緒25）年4月24日）

ただし、この用例は筆者には正確に解釈することができない。ここに誤植がないとすれば、「可能」の名詞用法の早期の例でもあることになるが、この「有可能」は文法的に見て「可能有」の誤りであるようにも思われる。

7 用例報告の誤りなどの訂正

語の使用状況の正確な把握が語史に関する信頼に足る議論の前提条件であることは言うまでもない。ところが、「可能」に関する従来の研究では考察の基盤となる用例が少ないうえに、そこに驚くほどの比率で誤りが含まれている。そして、他者の挙げた用例を信用してそのまま自らの考察に利用するという慎重を欠く行為を通じて、誤った用例報告は不正確な考察を連鎖的に生み出すことになる。

個々の研究者が先行研究の挙げる用例に対する軽信の姿勢を捨てることが肝要であるが、ここでは筆者の気付いた「可能」の誤った用例報告の事例などを明らかにする。

7.1 用例報告の誤り

朱（2006）は、「可能」の用法の変遷に関わる議論の最後で“推測を表す確実な用例は清末民初の文献に見出すことができる”と述べ、20世紀初期の雑誌に見られるという“用例”を4件掲げている。しかし、そのうち少なくとも次に示す2件は誤っており、無効である（1件は未確認）。用例の番号は朱のものである。

(32) 中国有三大害，而中国之民族可能絶，何謂三大害，曰兵，曰貧，曰病。（《東方雜誌》1904年第7期）

(33) 駁革命可能生内乱説。（文章標題，《民報》第9号，1906年）

原文によって確かめたところ、これらの“用例”における「可能」はいずれも実際には「可以」であった。

胡(2014)には問題がいろいろ多い。ここでの指摘は「可能」に関わる誤りに限定するが、まず、

- 22) 設漁団可能弭水盜，徙陸營可以墾荒地。(《湘報》第95号)
- 25) 駁革命可能生内乱說(《精衛著文章題》。《民報》1906年⁵⁸第9号)
- 27) ……，則條約可能取消。(漢民《排外与国際法》。《民報》1906年第10号)

の3件の“用例”における「可能」はいずれも原文ではやはり「可以」である。22)の“用例”について胡は、文の前半で「可能」、後半で「可以」が使われているのは、現代中国語で“～することができる”を表す表現が「可能」から「可以」に変わっていったことを示すよい証拠だと述べているが、まったく無意味な議論になっている。

また、次の読解困難な“用例”における問題は、「能」1字の誤りにとどまらない。

- 23) 一言論必為之檢閱，一挙動必為之監督，甚至形迹稍涉可能生存者，又逮捕入獄。(《論政府擬設檢報局》。《東方雜誌》1905年第1期)

この“用例”の原文は「一言論必為之檢閱，一挙動必為之監督，甚至形迹稍涉可疑者，亦逮捕入獄。」⁵⁹である。すなわち、原文の「檢閱」が胡の挙例においては「檢閱」になり、「可疑」は字数まで増えて「可能生存」になっている。

朱、胡ともに、挙げられた少数の用例の中にこれほど多くの誤りが含まれているという事実は研究の信頼性を損ない価値を減じる。そして、このことからすれば、筆者が原文に基づいて確かめた範囲の外にもさらに誤った用例がある可能性が高い。

筆者は、おそらく朱と胡は実際の資料を見ておらず、電子化された低品質のテキストに頼って調査を行っているのではないかと憶測する。意味の類似した「可能」と「可以」の混同は手作業でテキストを入力した作業者の不手際を疑わせ、字形の類似した「檢」と「疑」と「能」の混同は機械的な文字認識の誤りを疑わせる。ただし、胡の23)の例における「生存」の2字の挿入は意味や字形の類似に起因する混乱としては解釈することができず、不審

⁵⁸ 胡は『民報』第9号、第10号の刊行年を1905年と記しているが、正しくは1906年である。本文では訂正して引用した。

⁵⁹ 実際には原文では句読点としてもっばら「。」が使われているが、ここでは胡の表記に合わせて「，」と「。」の併用によって引用した。

である。

電子テキスト化された資料は言語研究に大きな利便をもたらすが、そこにはしばしばさまざまな誤りが含まれる。昨今の言語研究における電子資料、コーパスに対する過信の傾向は学界全体において戒められなければならない。特に、用例の数が限られている語史の問題の考察における不正確なデータの使用は致命的である。電子テキストの検索によって得られる“用例”は単なる用例の候補に過ぎないことを理解し、そのすべてについてテキスト化前の資料に基づいて確認の作業を行うことが不可欠である。

7.2 「可能」に関わる論述の誤読

胡（2014）は王力の論述を自身の「可能」借用語説に反するものと考え、反論を試みている。胡は王（1958）の「第四章 詞彙的發展」から

多数的新詞是由新的概念產生的。但是不能機械地了解新的概念。例如“政策”這一個概念，不能說原來漢人心目中絕對沒有它，只是說沒有經常地作為一個概念來表現在語言裏。如果從這個角度上看，就連“可能”、“自然”之類也可以認為新詞了。

というくだりを引用し、“王力氏は、「可能」などの語は用法上は新しく出現したもののだが新語でもなければ外来語でもないと考えているようだ。おそらく中国語に元来「可能」などの語があったからだろう。”と述べ、“中国語に元来「可能」の語はあったにせよ、推測を表す用法は日本からの借用であるから、実質上外来語だ。日本で和語を漢字で表記した結果が中国語の「可能」に偶然一致したに過ぎない。”と批判している。

しかし、これは胡の単なる誤読とそれに基づく無用の反論であろう。王の発言の趣旨は、“新語は多く新しい概念を表すが、必ずしもそうではない。現在「可能」の語を用いて表すような推測の概念、発想は昔から中国人の意識にもあっただろう。単に1語で表すことができなかつただけだ。それを可能にした「可能」は、表現としては古来中国語にあったにしても、新語と考えることができる。”ということであろう。筆者の理解によれば、王は「可能」を新語と認めることができると言っているのであり、それが外来語かどうかということは上のくだりでは問題としてもいない。したがって、王の論述にはそもそも胡が反論しなければならないような要素は含まれていないことになる。

8 おわりに

近現代の日中両語における「可能」という語の成立過程について、用例の観察に基づいて

筆者の推定するところを述べた。

日本語の「可能」は明治初年に最初の用例が見出される。それは、従前訓読されていた中国語の「可能」を直読することによって一語化したものであった。中国では古来おそらく断続することなく「可能」が使われていたが、20世紀には日本語の伝播の刺激によってその使用が活性化し、日本語式の用法が加わるとともに内発的な変化も生じ、量と質の両面に関して大きな変貌を遂げた。

「可能」の語は日本語で独自に作られたわけでもなければ、中国語内部で完結した語史を有しているわけでもない。現代の日中両語の「可能」は両言語の双方向の影響の結果として存在する。それがここで述べた筆者の推定であり、仮説である。

日中両語にまたがる有機的な語史を再構築するために、議論の重要な局面において証拠の不足を推定によって補わざるを得なかった。再考を要する問題が残っていることは確実である。また、20世紀の日中両語における「可能」の展開についてはほとんど考察が及ばなかった。今後の考察によって、「可能」の語史の理解がより確かで詳細なものになることを期待したい。

文献

- 亀井高孝・野上豊一郎・石原純編（1932）『岩波西洋人名辞典』（岩波書店）
- 篠田英雄編（1956）『岩波西洋人名辞典』（岩波書店）
- 渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』第33巻第1分冊
- 昭和女子大学近代文学研究室（1959）「F・プリンクリ」『近代文学研究叢書』第13巻（昭和女子大学光葉会）
- 沈国威（1994）『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容—』（笠間書院）
- 曹大峰（2007）「『可能だ』の意味と機能—対訳コーパスによる研究例—」趙華敏・楊華・彭広陸・村木新次郎編『日本語と中国語と—その体系と運用—』（学苑出版社）
- 曹大峰（2008）「可能性表現とその周辺—中国語の“可能”と日本語の『可能だ』を中心に—」日中対照言語学会著『日本語と中国語の可能表現』（白帝社）
- 惣郷正明・飛田良文編（1986）『明治のことは辞典』（東京堂出版）
- 高田時雄（2009）「清末の英語学—鄭其照とその著作—」『東方学』第117輯
- 田崎哲郎（1994）「『嘆喟喟国新出種痘奇書』について」有坂隆道・浅井允晶編『論集 日本の洋学Ⅱ』（清文堂出版）
- 田野村忠温（2010）「日本語コーパスとコロケーション—辞書記述への応用の可能性—」『言語研究』第138号
- 田野村忠温（2016）「『科学』の語史—漸次的・段階的変貌と普及の様相—」『大阪大学大学院文学研究

科紀要』第56巻

- 陳力衛（2011）「近代日本の漢語とその出自」『日本語学』第30巻第8号
- 卓南生（1990）『中国近代新聞成立史 1815-1874』（ぺりかん社）
- 服部匡（2011）「程度的な側面を持つ名詞とそれを量る形容詞類との共起関係—通時の研究—」『言語研究』第140号
- 服部匡（2016）「『可能性』の意味用法の変化—大正から平成まで—」『日本語学会 2016 年度春季大会予稿集』
- 林正子（2001）「^{デモクラシー} 徳先生・^{サイエンス} 賽先生の『新しい国』をめざして」『月刊しにか』第12巻第11号
- 松峰隆三（1977）『プリンクリ氏著 明治八年 語学独案内 解題』（桐原書店）
- 宮田和子（1999）「井上哲次郎『訂増英華字典』の典拠—増補訳語を中心に—」『英学史研究』第32号
- 森林泉子（1967）「借用中国語についての一考察—近代日本語形成の一要素として見た—」『東京女子大学日本文学』第28号 [論文での表記によれば、著者の姓は「森林」ではなく「森」。]
- 森岡健二（1955）「訳語の変遷—語構成を中心として—」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』第1巻
- 森岡健二（1965）「訳語形成期におけるロブシャイド英華字典の影響」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』第19巻
- 森岡健二・伊藤みえ子（1966）「訳語形成期におけるロブシャイド英華字典の影響Ⅱ」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』第21巻
- 山田孝雄（1935）『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』（宝文館）
- 曹丹红（2010）「马士曼《圣经》翻译活动再审视」『外国语文研究』2010年第1辑（南京大学外国语学院）
- 陳垣（1908）「牛痘入中國考略」『醫學衛生報』第6期、第7期 [参照は陳智超編『陳垣早年文集』（中央研究院中國文哲研究所、1992年）所収の版による。]
- 戴耀晶（2003）「现代汉语助动词“可能”的语义分析」中国语文杂志社编『语法研究与探索』12（商务印书馆）
- 董秀芳（2002）『詞彙化：漢語雙音詞の衍生和發展』（四川民族出版社）
- 董秀芳（2011）『词汇化：汉语双音词的衍生和发展（修订本）』（商务印书馆）
- 胡静书（2014）「推测副词“可能”的来源」『语言研究』第34巻第3期（华中科技大学中国语言研究所）
- 江藍生（1990）「疑问副词“可”探源」『古汉语研究』1990年第3期（古汉语研究杂志社）
- 江藍生（2000）『近代汉语探源』（商务印书馆） [江（1990）の改稿版を収める。]
- 李海霞（2011）「汉语“可能”、“必然”意义表达的发展」『重庆师范大学学报（哲学社会科学版）』2011年第4期
- 李志剛撰（1985）『基督教早期在華傳教史』（臺灣商務印書館）
- 刘月华・潘文娛・故辮（1983）『实用现代汉语语法』（外语教学与研究出版社）

- 刘月华·潘文娉·故晔 (2001) 『实用现代汉语语法 (增订本)』 (商务印书馆)
- 吕叔湘主编 (1980) 『现代汉语八百词』 (商务印书馆)
- 蘇精 (2000) 『馬禮遜與中文印刷出版』 (臺灣學生書局)
- 蘇精 (2014) 『鑄以代刻—傳教士與中文印刷變局』 (國立臺灣大學出版中心)
- 譚树林 (2011) 「“汤姆司中文铅活字”考论」『齐鲁学刊』2011年第4期 (山东曲阜师范大学)
- 王力 (1958) 『漢語史稿 (下册)』 (科學出版社)
- 杨黎黎 (2012) 「认识情态词向让步标记的发展」『汉语学报』2012年第4期 (华中师范大学语言与语言教育研究中心)
- 叶再生 (2002) 『中国近代现代出版通史 第一卷 清朝末年』 (华文出版社)
- 赵晓兰·吴潮 (2011) 『传教士中文报刊史』 (复旦大学出版社)
- 朱冠明 (2006) 「狀態動詞“該”的來源—附論“可能”」『漢語史學報』第6輯 (上海教育出版社)
- Colburn, Henry (1815) 'Intelligence in literature and the arts and sciences'. *The New Monthly Magazine and Universal Register*, Vol. 4. London: H. Colburn. [無署名の記事。言及の便宜上出版者の名によって表示した。]
- Griffis, William Elliot (1875) 'Go-gaku Hitori Annai'. *The Japan Weekly Mail*, September 4th and 18th, 1875. [無署名の分載記事。書き手は本論筆者の推定による。Griffis (1876) における記述と内容や表現のうえで共通する要素が認められる。]
- Griffis, William Elliot (1876) *The Mikado's Empire*. New York: Harper & Brothers, Publishers.
- Hu, Jingshu (胡静書) (2015) 'The strength of the flow of Japanese words into Chinese: 'ke neng' (可能 ka nou) as a case in point'. 『東アジア文化交渉研究』第8号 (関西大学大学院東アジア文化研究科)
- Lebrun, Yvan (1965) *'Can' and 'May' in Present-Day English*. Brussels: Presses Universitaires de Bruxelles.
- Lee, Sidney (ed.) (1898) *Dictionary of National Biography*, Vol. 54. London: Smith, Elder, & Co.
- Lord, Eleazar (1813a) *A Compendious History of the Principal Protestant Missions to the Heathen in Two Volumes*, Vol. 1. Boston: Samuel T. Armstrong.
- Lord, Eleazar (1813b) *A Compendious History of the Principal Protestant Missions to the Heathen in Two Volumes*, Vol. 2. Boston: Samuel T. Armstrong.
- McNeur, George Hunter (1934) *Liang A-Fa: China's First Preacher, 1789-1855*. Shanghai: Kwang Hsueh Publishing House (廣學書局) [参照は Jonathan A. Seitz による補訂再刊版 (Eugene, Oregon: Pickwick Publications, 2013) による。]
- Morrison, Eliza (1839) *Memoirs of the Life and Labours of Robert Morrison, D.D. in Two Volumes*, Vol. 1. London: Longman, Omre, Brown, Green, and Longmans.
- Moseley, William Willis (1842) *The Origin of the First Protestant Mission to China, and History of the*

- Events Which Induced the Attempt, and Succeeded in the Accomplishment of a Translation of the Holy Scriptures into the Chinese Language, (at the Expense of the East India Company) , and of the Casualties Which Assigned to the Late Dr. Morrison.* London: Simpkin and Marshall.
- Pinneo, Timothy Stone (1854) *Pinneo's Revised and Enlarged Primary Grammar of the English Language.* Cincinnati: Van Antwerp, Bragg & Co.
- Quackenbos, George Payne (1866) *First Book in English Grammar.* New York: D. Appleton and Company.
- Wherry, John (1890) 'Historical summary of the different versions of the Scriptures'. *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China, Held at Shanghai, May 7-20, 1890.* Shanghai: American Presbyterian Mission Press.
- Willeke, Bernward Henry (1945) 'The Chinese Bible manuscript in the British Museum'. *The Catholic Biblical Quarterly*, Vol. 7, No. 4. Washington, D.C.: The Catholic Biblical Association.
- Wong, K. Chimin and Lien-Teh Wu (王吉民・伍連德) (1932) *History of Chinese Medicine, Being a Chronicle of Medical Happenings in China from Ancient Times to the Present Period.* Tianjin: The Tientsin Press, Ltd.
- Wylie, Alexander (1867) *Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese: Giving a List of Their Publications, and Obituary Notices of the Deceased, With Copious Indexes.* Shanghai: American Presbyterian Mission Press.

The Etymology of *Kanoo/Keneng* in Modern Japanese and Chinese

Tadaharu TANOMURA

The word ‘可能’ (*kanoo/keneng*), which denotes ‘possible’ and adjacent meanings, is among the most frequent and important expressions related to logical notions in contemporary Japanese and Chinese, although its syntactic behavior and the range of meaning it covers do not coincide between the two languages. But its etymology still remains obscure in spite of some efforts made to date. This article, based upon a survey of Japanese and Chinese publications in the nineteenth and early twentieth centuries, attempts to elucidate when and how the word came into existence and/or acquired the properties that it currently possesses.

The two-letter word ‘可能’ (*kanoo*) in Japanese, as is argued here, was formed by assigning a Sino-Japanese pronunciation (*on-yomi*) ‘kanoo’ to the Chinese word or phrase ‘可能’ in the middle decades of the nineteenth century. This view is in straightforward disagreement with those of Sōgō Masaaki and Hida Yoshifumi’s *Meiji no Kotoba Jiten* (‘Dictionary of the Words of the Meiji Era’) and Shogakukan’s *Nihon Kokugo Dai Jiten* (‘Grand Dictionary of the Japanese Language’), both of which unanimously claim that ‘可能’ originates from a native Japanese (*wago*) expression.

With regard to ‘可能’ (*keneng*) in Chinese, three researchers have put forth competing theories to explain the change in its usage that occurred in the twentieth or possibly late nineteenth century. Two of them, Dong Xiufang and Zhu Guanming, construe the new usage of ‘可能’ as the result of a semantic shift that took place language-internally, whereas Hu Jingshu maintains that ‘可能’ in contemporary Chinese is a brand-new loan from Japanese, which only happened to be homographic with ‘可能’ in older Chinese. As a matter of fact, however, the reality was most likely not to have been so simple as those researchers assume. It will be argued here that ‘可能’ in contemporary Chinese is indeed a developed descendant of the same expression in older times, but that at the same time it acquired a set of novel properties under the profound influence exerted by Japanese on Chinese in modern times.

Keywords: ‘可能’, *kanoo*, *keneng*, etymology, Japanese, Chinese